
冬の少年と夏の少女

時雨煮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の少年と夏の少女

【Nコード】

N3916V

【作者名】

時雨煮

【あらすじ】

西暦二〇一五年、七月末。夏休み直前の週末。高校二年生の鏡花は、育ての親が勤める大学の研究室で、千年後の世界を観測するプログラムを発見する。資源が枯渇した未来の世界では、“術式”と呼ばれる未知の力を手に入れた人々が、衰退した文明を復興させつつあった。冬の北方無人地帯を調査していた開拓士の少年は、夕日に染まる時計台の前で、自らの運命を変える出会いを果たす。

“戦いのまえ”

三階建てのビルの屋上からは、廃墟と化した街並みが見渡せる。辺り一面に薄く積もった雪が夕陽に照らされ、世界は紅く染まっている。

経年劣化や植物の侵食、冬ごとの積雪によって、ほとんどの建物が崩れたり傾いたりしている中で、少年が立つビルはかるうじてその形を保っていた。

少年は南西の方角を眺める。太陽は既に半分ほど、山々の影へと隠れつつある。

彼はその視線を右に向け、遠くに見え隠れする目標が、木々を薙ぎ倒す音を聞いた。

少年は厚手のジャケットの内側から赤い携帯電話スマートフォンを取り出して、この作戦の発案者との会話を始める。

「そろそろか」

『うん、あとちょっと……関さんは函館に戻れたかな』

少女の言葉に、少年は背後を振り返る。南東の空は既に蒼く、空を飛ぶ鳥の視界なら、遠くに街の灯りを見つけられそうだった。

「あつちは大丈夫だろ。どっちにしても、俺たちが失敗したら後がないんだ」

『そうだね』

夕焼けに向き直った少年は携帯電話を操作し、通話状態を維持したままアプリケーションを選択する。

液晶画面に“術式”^{コード}が表示されたのを見て、彼は携帯電話をジャケットの中に仕舞った。

『無茶して死なないでよ』

「わかつてる。指示は頼んだぜ」

腰から下げていたサーベルの柄を掴み、鞘から半分だけ抜いて具合を見る。

左手で拳銃を抜いて構え、すぐに右脇のホルスターに戻る。

使い慣れたふたつの武器の調子確かめながら、少年は白い息を吐いた。

「夢じゃ、ないんだよな」

『それは、突き詰めるとなかなか哲学的な話になるね』
「そうかい」

建物が踏み潰される音が響く。淡く光る鱗と鬣^{たてがみ}が、地面を揺らしながら少しずつ近づいてくる。

西風が運ぶ冷気が少年の頬を撫で、眼と鼻を刺激する。
動きを妨げる防寒具を脱いで、少年は呟いた。

「……寒いな」

『うん、まあ。そっちは冬だもんね』

01 “発掘”

西暦二〇一五年、七月末。夏休み直前の週末。期末考査をなんとか切り抜けた高校二年生の羽村鏡花^{はむらきょうか}は、短い夏期休暇中の活動資金を得るために、午前中から奮闘していた。

場所は、彼女が通う高校と同じ市内にある情報系大学の研究室。窓際には教授の机があり、育ての親である教授本人が椅子に座って資料を眺めている。その手前には、研究生用の机が向かい合わせにふたつずつ。さらに出入口の扉側には会議用の長机があり、その上では新品の雑巾や洗剤が出番を待っていた。

扉から見て左側の壁面には、研究室用のサーバマシンや周辺機器が積まれたラックがあり、もう一方の壁面には研究資料などが納められた棚が並んでいる。

研究室の棚卸しの手伝いを命じられていた鏡花は、学校指定の紺色のジャージに身を包み、棚の中身を片っ端からリスト化していた。そして三時間かけてようやく、教授の机のすぐ横にある一番最後の棚まで辿り着いたところだった。

「mira兄ィ、この棚ってば最後に触ってから何年経ってるのかい」

引き戸を開けた先にあっただのは、黄色に焼けた古いソフトのパッケージ、年代物の磁気テープに大小入り混じったフロッピーディスク。そして、書類や封筒が乱雑に詰め込まれた状態で、埃を被ったダンボール箱だった。

軽く舞い上がった埃を振り払い、眼鏡を外して拭きながら、鏡花は雇い主である教授に問いかけた。

「なんかえらいことになってるよ」

「せめて仕事中くらいは、みらいじゃなく、みよし教授と呼ばたまえよ」

鏡花が打ち込んだ棚卸しの一覧と大学の備品リストを並べて印をつけていた教授——各務^{かがみよし}美良は、ボールペンを置くと立ち上がり、鏡花の横から棚を覗きこんで、その中身と自身の記憶を照合する。

「十年……いや、ここに来てから開けた覚えが無いから十五年くらいか」

「時効ってことで」

引き戸を閉めようとする鏡花を遮って、教授は作業を続けるように促す。

「待て、折角の機会だから、やつつけてしまおうじゃないか。面白そうなモノがあったら知らせてくれたまえ」

「りょーかい。じゃあ、ここまでの分を送っとく」

「うむ」

自分の携帯電話に打ち込んでいた棚卸しの一覧をメールで送信して、鏡花は棚に向き直った。劣化の酷いメディアは、不燃ゴミの袋に投入された。ケースに入ったメディアやソフトに関しては、タイトルだけメモ帳に打ち込んで、元の位置に戻していく。

「おー、天体シミュレータ発見。動くかな」

「ん。ああ、懐かしいな。後で見てもよう」

星空を背景にロゴが印刷されたパッケージを教授の机の上に置いて、彼女は作業に戻る。いくつかの物品について教授に判断を仰ぎつつ、順調に片づけていった。

「あとはダンボールだけだけど、やっちゃうかい」
「うむ、任せた」

鏡花は埃を舞い上げないように気をつけながらダンボール箱を引っ張り出し、床の上に書類を仕分けていく。過去の研究資料や光熱費の明細書、親族からの手紙などを並べながら、教授に疑問を投げかける。

「高エネルギー素粒子の衝突における余剰次元観測による世界の情報化」——昔は量子論なんか研究してたのかい」
「東北に居た頃はね。加速器を使っているいろいろやっていたけど、こっちに来てからは人工知能一本で全く触れてないな」

書類を仕分けていた鏡花の手が、一通の封筒を手にしたところで停止する。裏返しても何も書かれていないことを確認して、改めて表側の英文に目を向ける。

「未開封のエアメール。宛先は、みら兄イの前の大学。送り主は、えーと……“Depleted World”」
「ん。どうした、きょーちゃん」

リストから顔を上げた教授にも見えるように、鏡花はエアメールを持ち上げた。封筒の重さに細い腕が揺れ、それに合わせて教授の視線も左右に動く。

「ふむ、全く覚えが無い。重要な奴はその箱には入れなかったはずだし」

「開けちゃうよ、みら兄イ」
「うむ」

立ち上がって教授からハサミを受け取った鏡花は、封筒を開けて、教授の机の上に中身を取り出す。封筒の中には、英文の手紙と書類、ラベルの貼られたディスクが入っていた。

それらを一通り眺めて、鏡花はぼそりと呟いた。

「全部英語かあ」

彼女はディスクのケースを手にとると、部屋の反対側に向かい、サーバラックの片隅に設置されたノートパソコンの蓋を開けた。小さな丸椅子に座ると、スリープ状態から解放されたパソコンで翻訳ツールを起動し、ラベルに記されている単語を打ち込んでいく。

「えーと、“枯渴世界”観測計画のクライアントプログラム、および、観測者用アカウント、それから……イベント、変更、モジュール」

「“事象改変モジュール”かな。思い出してきたぞ」

手紙を読んでいた教授が顔を上げる。鏡花はケースからディスクを取り出すと、ノートパソコンのドライブに差し込み、ウイルスチェックを起動させてから、椅子を回して教授に向き直る。

「前の大学でやってた研究を元にした論文をいくつか発表していて、そのときの研究の成果を自分のプロジェクトに利用させてくれてメールが来て、許可したことがあった」

教授は手紙を置いて腕を組み、僅かに首を傾けて天井を見上げる。

「確か、何年か経ってすっかり忘れた頃に、システムが完成したから接続用のプログラムを送るぜ、気が向いたら見てやってくれと返

信が届いた」

「面白そうなのに、放置しちゃったん」

鏡花も首を傾げる。ディスクと一緒に入っていた書類を手にとったものの、専門用語が盛られた英文の前に、その手は一步も進めずにいた。

「あの頃は、移籍やら引越しやらで慌ただしかったからなあ」

「ああ、そうなんね」

「きょーちゃんのこともあったしなあ」

「お手数おかけしまして」

「うむ」

鏡花はノートパソコンの画面に目を向ける。チェック完了のメッセージを見て、結果を報告する。

「感染、警告なし。 mira兄イもデータ見るかい」

「もちろん」

「ではでは、コピーしてる間に残りを片付けてしまえますかね」

「うむ、任せた」

共有ディレクトリにデータを丸ごと放り込んでから、鏡花は立ち上がってダンボール箱へと向かった。

鏡花と各務教授が梱卸しを終えて、英文読解に着手し始めてから一時間。研究室の扉が開かれ、茶色のビニール袋を両手に提げた体格のいい青年が入ってきた。

「教授ー、弁当買ってきたさー」
「ああ、ありがとう」

院生の佐々木は教授に声をかけて、会議用の長机の上にビニール袋を置いた。そして、手の付けられていない掃除用具に気付いて、溜息をつく。

「教授は和風ハンバーグでしたよね……って、大掃除も先に始めとくって話だったのさ」

声をかけられた鏡花と教授は顔を見合わせ、壁の時計を見て揃って苦笑した。

「ありや、もうこんな時間」
「少し熱中し過ぎたかな。休憩しようか」

長机の方から漂う匂いにつられるように、教授は自動翻訳の洗礼を受けた書類のコピーを手を持ったまま、立ち上がって長机に移動する。掃除用具を床に置き、弁当を並べていた佐々木は、後からやってきた鏡花に向って疑念を口にした。

「でもって鏡花君、何があったのさ」
「掘り出し物を見つけちゃって。これなんだけど」

佐々木は席に着いた鏡花から書類を受け取ると、内容を読み上げ始める。

「エネルギー資源の枯渇による世界情勢への影響を予測するシステムを構築するための、“枯渇世界”観測計画……って、地球シミュレータってことかな」

「mira兄イと手分けして読んでたんだけど、前半部分には計画の目的とか意義とかがくどくど書かれてた」

「ああ、出資者向けの文章かい」

佐々木が書類を捲るペースが上がる。半分まで読み進んだところで、教授が口を開いた。

「後半は僕が読んでみた。稼働からのタイムスケジュールには、資源枯渇を引き起こすために発生させる予定のイベントが記されている」

「自然災害に人災事故、テロに内紛、おまけにネットワーク・クラシス、ねえ。まあ、全くあり得ない内容でもないのさ」

佐々木の言葉に、教授と鏡花も頷く。

「その後には、システムの概要、観測可能な事象の一覧、バージョンアップの予定などが書かれている」

「盛り沢山ですな。しかし、これを実現するなら量子コンピュータが来いって内容だと思っわけなのさ」

再度、各務教授は頷いた。

「十五年前に、地球規模の観測、それに加えて実時間の百倍の時間経過。せいぜい環境問題啓蒙ゲームとして世に出せる程度の出来ではないか、というのが僕の予想なのだけれど」

教授はそこで口を閉ざすと、机の上の割り箸を手にとった。

「とりあえず、冷めないうちに昼飯にしようじゃないかね」

昼食の後、一同は大掃除の無期延期を満場一致で決定し、それぞれの作業に取り掛かった。

「それじゃ、クライアントプログラムのインストールとマニュアルの翻訳は、二人に任せたらね」

教授はそう言って、棚卸しの報告書を事務局に提出するため、研究室から出て行った。佐々木はデスク内にあった説明書を翻訳しながら、鏡花にインストールの手順を指示している。鏡花は自分のノートパソコンではなく、共用のデスクトップマシンで作業を行っていた。

「インストール完了、最新パッチのダウンロード開始。てことは、まだサーバは生きてるのね」

「ある程度は成果を上げたってことか。えーと、パッチ当たったら初期設定が始まるはずなのさ」

「はいな」

鏡花は少しずつ進んでいく進捗状況の目盛りを眺めるのを止め、パソコンに接続してある赤い筐体の携帯電話を手にとった。研究用に購入してあったそれは最新式のスマートフォンで、いくつかの改造が加えられている。

「あ、またファームウェア変わってる」

「渥美君がモーションセンサー周りを改善するとか言ってたのさ」

液晶に表示されている“各務研カスタム”の文字をなぞると、画面がアイコンによるメニュー表示に切り替わり、一瞬の間を置いて

それらが立体的に浮かび上がった。鏡花の人差し指がアイコンを押そうとすると、指の動きに合わせてアイコンが逃げるように移動した。

「いや、これメニュー選べないかい」

「終了ボタンでちゃんとしたメニューに戻るって」

「はいはい、どう見てもネタアプリです」

メニュー表示に偽装したアプリケーションを終了してから、スマートフォンを充電器に戻す。鏡花はディスプレイを見て、バージョンアップの状況を確認する。

「パッチ終わり。メールアドレスとかは、実験用のサブで行きますですよ」

「ほいさ」

佐々木の指示に従って、各務教授のために用意されていたアカウントの基本情報を登録していく。

「対話用アカウントはどうすればいいのかい」

「マニュアルに書いてない。確か、バージョンアップでネット通話に対応するとか書いてあったから、そのアカウント入れてみるとか」

「じゃ、私ので……次、対話用インタフェース装置」

「それはあったはず……えーと、観測代行者とのコミュニケーションに用いる装置の指定、って曖昧なのさ」

「物理アドレスと、画像か三次元情報があればいいみたいだから、これにしておきますかい」

鏡花は、充電器に戻したばかりのスマートフォンを指し示す。

「ああ、それだったらモデルデータもあるな」

スマートフォンの情報を指定された形式に変換し、引き続き設定を行っていく。

「観測基準座標。初期値は……岩手県南部って、みら兄ィの前の職場ですのう」

「GPS情報送れば、後で変更できるっばいのさ」
「なら、とりあえずこれで」

鏡花が設定完了のボタンを押すと、画面が切り替わる。白いウィンドウには、数行のメッセージだけが表示されている。

「観測時差プラス三六・七二五秒。時間経過比二万パーセント。接続中観測者一名」

「他には誰も繋いでないってか。ぼっちなのさ」

「メニューは“代行者選択”だけ選べるみたい」

グレー表示のメニューの中でひとつだけ選択可能なメニューを横から覗いて、佐々木はマニュアルを検索する。

「代行者選択。観測基準の周辺、半径およそ一千フィート以内の人物を、観測代行者として指定する。代行者には対話、観測用インタフェースが与えられる。選択完了後、観測基準はインタフェースに固定される……とか何とか」
「いいからやってみろってことですね」

鏡花がメニューを選択すると、画面に検索中の文字列が点滅し始める。

「時差がプラス三十六万日ってのは、年に直すとどれくらいなのさ」
「九百九十年と四ヶ月、くらい」

計算を済ませていた鏡花は、結果を佐々木に伝える。

「ふむ。十五年前にエネルギー資源枯渇イベントが起きた、という設定で始めてから、およそ千年後の世界を予測しようって話だと……」

画面上のメッセージが切り替わる。鏡花は文章を翻訳ツールに打ち込んで、結果を読み上げた。

「……範囲内に選択可能な代行者が存在しません」

「人類滅亡、って落ちも否定できないのさー」

「ぐぬぬ……」

鏡花は肩を落として俯くが、すぐに顔を上げてスマートフォンを手を取った。

「内地の人たちは衰退しました」

「ああ、うん。観測基準の変更方法か。調べてみるのさ」

事務局から戻ってきた教授が、佐々木から結果を聞いて腕を組む。

「残念、北海道も無人の地ということかね」

「いや教授ー、三百メートル以内に人が居なかっただけ、という可能性もまだ否定できないのさ」

教授が戻ってくるまでの間に、スマートフォンを持って大学の敷地内を一周してきた佐々木が、汗を拭きながら反論する。

「なるほど。それできょーちゃんに携帯を持たせたわけか」

「政令指定都市でも駄目ならひとまず諦めようってことで」

「どうせ大掃除終わったら外に出る予定だし、ついでに千年後の世界に人類が生き残ってるかを確認してくるのですよ」

ジャージ姿から私服に着替えた鏡花は、赤い携帯電話を持った手で敬礼する。彼女は教授からバイト代を受け取った後、電車で二十分の距離にある街に買い物に行く予定だった。

「そんなわけで、調査任務に行ってきますよ」

「ってか、おい。登録名、ミラになってるぞコラ」

「げえっ、もうバレた」

鏡花は携帯電話を鞆に仕舞うと、研究室から飛び出した。階段で転ばないように気をつけながら、鞆からカードキーを取り出す。

廊下を速足で歩き、出入口の扉まで辿り着いた彼女は、認証機械で退館記録を行ってから扉を開ける。

夏の日差しに熱せられた外気が隙間から入り込み、鏡花の体にまとわりついた。

「……あっつ。熱暴走するっつの」

02 “契約”

紀元三六六五年、冬。その土地は色を失ったように見えた。

空を見上げれば一面の灰色。曇天からまばらに降る白い雪は、舗装道路や高層建築の成れの果ての上に、等しく降り積もっていく。

革の防具と防寒具に身を包み、右手に片刃の直刀を持った少年は、背後の暗闇に視線を向ける。今しがた彼が探索を終えた地下街の出口は、瓦礫で半分埋まっていて、足元に気をつけながらでなければ出入りは難しい。少し上げた視線の先には、黒く錆びつき、傾いた電波塔が見えた。

「退却は困難。となると、仕方ない。撃退するしかないな」

少年はそう呟くと、右手の剣を握り直し、懐に入れていた左手を正面に向けた。その手に持つ拳銃が狙うのは、隙を窺う灰白色の獣、雪狼の群れ。

「装填」

動作と音声による発動命令が与えられ、銃の周囲に幾何学模様の輝きが展開を始める。それは、灰色の世界を染める先触れの赤。

少年の名はクロス・リユート。北方の無人地帯を旅する探索者である。

雪狼はクロスの動きに反応して、彼を取り囲むように散開する。

「左右に三体ずつ、正面に二体。まずは分断するか」

命令を与えてから十秒後、魔法陣の展開を終えた銃が淡い光に包まれる。クロスが引き金を引くと、銃口から不可視の弾丸が放たれ、正面の雪狼に命中した。その瞬間、弾丸として圧縮されていた空気が解放され、雪狼の体を後方に吹き飛ばし、降り積もった雪が舞い上がる。

空気が弾ける音に雪狼たちが気を取られた瞬間を狙い、クロスは右から後方に回り込もうとしていた一体に向かって走り込む。突撃の勢いを乗せて斜めに斬り上げられた片手剣は、標的の前半身に深く食い込んだ。さらに体重をかけて剣を引き抜きながら、クロスは振り返って状況を把握する。

正面にいた残りの一体は、炸裂弾の衝撃を受けて朦朧としている。左側の三体は、クロスの動きにまだ気付いていない。

「——ッ」

そして残る二体は、彼の接近に気付いて攻撃態勢に移っていた。右から飛びかかってきた一体を片手剣で受け流し、左から足元を狙う攻撃を真横に飛んで回避する。

体勢を崩した雪狼に対して剣を振り下ろして一撃を加え、追撃を避けるために後退して建造物を背にし、再び左手の銃を構えた。初弾を放った後に光を失っていた銃は、再び十秒をかけて魔法陣を展開していく。

「再装填完了。さて、まだ続けるなら容赦しないぞ」

リーダーを含めた半数を行動不能にされた雪狼の群れは、しばらくクロスと睨み合っていたが、それ以上戦闘を続けることはせず、朦朧としていた一体が意識を取り戻して遠吠えを上げると、一斉に踵を返して去って行った。

「……“解放”」

展開されていた魔法陣が完全に消えたのを見届けてから、クロスは大きく息を吐いて周囲を見渡す。雪狼の死体は二つ。炸裂弾に吹き飛ばされた一体と、彼の突撃によって致命傷を負っていた一体である。

「毛皮を持って帰れば、エンヤの姐さんも喜ぶかな」

剣に付いた血を雪で軽く洗い流すと、クロスは戦闘前に物陰に隠しておいた革袋を拾い上げ、中から解体用の短刀を取り出した。

雪狼から毛皮を剥いだ後、クロスは廃墟の別区画、半壊した木造建築内に設営していた拠点に戻った。崩れた外壁の隙間を抜け、広間へと入っていく。その途中、クロスが足を止めて視線を上げると、正面玄関の上に残された骨組みだけの塔の隙間から、前文明の機械が見えた。

「階段が壊れてなかったら、あれも調べられるのにな」

以前の調査で見つけた文字盤と部品から、何のための機械だったのかは彼にも理解できている。クロスは首を振ると、わずかに残された屋根の恩恵を受けている一角に歩を進める。そこでは、先客が携帯用の小型焔炉コンロの側で暖を取っていた。

「遅かったな、馬鹿弟子よ」

「雪狼に襲われて、追いついてました。師匠は早かったですね」

「ああ。思った通り、ここから北はもう雪が深くて駄目だな。雪上車輪タイヤの試験もここで終わりってこった」

前日の探索によって集められた発掘品が入っている麻袋の横に、今日の戦果である毛皮と革袋が置かれる。クロスが瓦礫の上に腰を下ろすと、師匠と呼ばれた男――セキは問いかけに答えた。

「どうやら手土産もこれ以上運べない量になっちゃったようだしな。明日には出発しようと思うんだが、問題無いか」

麻袋には前文明の調度品や装飾品。革袋には図書館で発掘した古文書が数十点と、地下街の探索中に見つけた機械式時計が数点。

「確かに、これだけあれば十分ですかね」

「よし、だったら暗くなる前に積み込みしまうか」

そう言って、セキは立ち上がった。それにならってクロスが立ち上がるうとした瞬間、硝子ガラスを引っ掻いたような甲高い音が周囲に響き始めた。

クロスは耳を押さえて僅かに呻きを漏らす。

「う……」

「なんだ、こりゃ」

顔をしかめながらも平然と立っている師匠を見て、クロスは音の発生源を探して周囲を見回した。

そして、建物の正面の方から白い光が差し込んでいることに気付いた。

「これは、“術式”の光か」

クロスが目にした方向を見て、セキが口を開いた。左腕に装着している無骨な黒い籠手の具合を確認しながら、言葉を続ける。

「ちょいと見てくるが、お前はどつする。動けるか」

「はい、俺も行きます」

クロスは耳から手を離して立ち上がると、剣を抜き、セキの後について瓦礫の隙間を進んでいく。

近付くにつれて、白い光は強くなっていく。

二人が建物の外を伺うと、降り積もった雪の上で、複雑な魔法陣が展開を続けていた。

「……多重構成術式、てことは何か出てくるかもな」

魔法陣が展開を終えると同時に、クロスの耳に無機質な声が響く。

「『結合、展開完了、構成開始』……師匠は聞こえましたか」

「いいや。何でかわからんが、お前にだけ聞こえるみてえだな。使い手は見当たらんし、しばらく様子を見るしかないか」

内容を伝えられたセキは、前を見たまま答える。収縮し始めた魔法陣の中心に、小さな物体が回転しながら出現する。

薄く平らな長方形の物体は赤く、一方の面には黒く滑らかな板が埋め込まれている。

「『構成完了』……あれは何でしょうか」

「前文明の機械のようだが、遠くてよく分からんな」

魔法陣の光は完全に消え、後にはゆっくりと回転する物体だけが

残された。雪はいつの間にか止んでおり、周囲に他に動くものの気配はない。

セキは右手で頭を搔いて思案する。

「さて、近づくべきか、それとも何か投げてみるか」

「待つて下さい、師匠、また声が。『オブザーバ・ナンバー八十七
“ミラ”より観測代行者の要請があります』」

セキは眼を見開き、首を巡らせてクロスを見た。クロスは頷いて言葉を続ける。

「『承認する場合、対話用インタフェースに接触してください』……ここまでみたいです」

しばらく沈黙した後、セキは右手で回転する物体を指差した。

「……は。聞き間違いじゃなけりや、ありや“代行者の証”ってことか」

「都で祀られてたのは、もっと大きな箱でしたよね」

「ああ。大昔に“術式”をこの世界に与えた機械。カミオカの“本体”以外は、どれも動かなくなってから何百年も経ってるって話だったけど……おい、行くのか」

剣を鞘に収めて歩き出したクロスを追って、セキも建物の外に出る。

「本物ならこれ以上ないお宝でしょう。“神託”とかいう眉唾ものの言い伝えも、実態を明らかにできるかもしれませんよ」

「そりゃそうだが、何かの罠ってことは……ねえか。この時期にここまで来るような奴は、北方には居ねえな」

雪を踏みしめながら、クロスは歩いていく。

装置の目の前でやってきた彼は、一瞬躊躇った後、右手を伸ばした。その手が装置を掴んだ瞬間、片面の黒い板に文章が現れる。

「観測代行者の登録が完了しました」、か」

「何が起こるか分からんから、迂闊にあちこち触るなよ。詳しく調べるのは街に戻ってからするぞ」

辺りを警戒しながら、セキはクロスに声をかける。

クロスはその言葉に従って、黒い板の下にあるボタンに触れないようにしながら、装置を裏返した。その裏側には、片隅に小さな四角い穴が三つ開いているだけだった。

「^{ボタン}釦がひとつだけって、どう使うんですかね」

「“神託”を受け取るだけなら、まあ十分だとは思うが……って、文字が横向きになってんじゃねえか」

「本体の向きによって変わるみたいですよ、ほら」

再び表側の観察に戻った二人は、装置を傾けると表示が切り替わることに気付いた。

「ほう。どうなってるんだろうなこいつ」

セキが装置の黒い面を叩くと、文章が消え、そこからいくつかの幻像が浮かび上がる。クロスがその内のひとつに触れようとすると、“呼出中”の文字が点滅し始めた。

「……やっちゃいましたか」

「迂闊に触るなっつったよな」

「どっちかって言うと触ったのは師匠ですよ……」

03 “対話”

メールの着信を知らせる音に鏡花は足を止め、鞆から携帯電話を取り出した。

鏡花はアスファルトとコンクリートの照り返しを避けながら、佐々木から送られてきたメールに目を通す。

『生存者発見。渥美君が代行者選択しちゃったのさ』

彼女は買い物を終えた後、市役所の北にある建物の前で衛星測位情報を送ってから、駅へと向かって歩いている途中だった。

「何で戻るまで待っていてくれないかなあ」

眉根を寄せてそう呟いた鏡花の携帯電話から、今度は通話着信のメロディが流れ始める。

未登録のアカウントからのインターネット通話の着信は、古い時代劇のオープニングテーマをそれなりの音量で流しており、周囲の視線を集めつつあった。

普段の鏡花なら応答拒否して終わらせるところだったが、左手に持っていた赤いスマートフォンが勝手に動いて発信しているとなると、それも憚^{はば}られた。

「選択完了メッセージとか、かな」

鏡花は自分を納得させるように呟くと、一拍置いて通話ボタンを押した。

「もしもし」

『……あれ、えーと……』

スピーカから聴こえてきたノイズ交じりで不明瞭な声は、佐々木よりも若そうな男のものだった。

「もしもし。こちら羽村鏡花です」

『え、あ、はい。こちらは代行者、クロス・リユート』

「リユウは流れる方かい。それとも飛んでる方かな」

『……ちよつと理解不能ですが、どちらかというと流れる方かな』

鏡花はわずかに微笑むと、再び駅に向かって歩き始めた。

「おっけー了解。で、黒須君に置かれましては何の御用でしょうか」

『御用というか、適当に触っていたら、こうなってしまったというか』

「間違い電話でござるか」

『……またもや理解不能ですが、そんな感じかと思われます』

鏡花の微笑みが広がる。

『……ハムラ様とお呼びすればよろしいでしょうか』

「あー、そんなに丁寧に話さなくてもよござんす。同年代っぽいし、鏡花でいいよ」

『はあ。えーと……了解、キョーカ』

「ちよつと今ゆっくり話せる状況じゃないんで、一時間くらい待っててくれるかい。研究室に着いたらこっちから連絡するから」

『え、えつと』

鏡花は返事を待たずに通話を終わらせる。スマートフォンをポケットに入れ、左手で頬を叩いて表情を引き締める。

「なかなか興味深い。誰かの悪戯じゃなければだけど」

未登録だったアカウントに“黒須流人”と名前をつけ、佐々木に對してすぐに研究室に戻る旨のメールを送信する。

送信完了の表示を横目に見ながら、鏡花は改札を通って駅の構内へと入っていった。

「なんで勝手にやつちゃうのかーい」

「いつやーわりーわりー。話聞いてたらえれー面白そうだったんで、つい出来心でなー」

電車で二十分揺られた後、駅からさらに十五分歩いて研究室に戻った鏡花を迎えたのは、大学四年生の渥美^{あつみ}だった。スーツ姿に縁無し眼鏡の彼は、共用のマシンの前に座って作業を行っていた。

「あれ、渥美さんだけですか。教授と佐々木さんはどうしました」

「ついさっき、二人とも会議に呼ばれてった。そのまま飲みになるかもな」

「あれまあ」

鏡花は鞆からスマートフォンを取り出し、充電器に戻した。

「あー、そういえば。会社説明会お疲れ様です」

「いやいや。教授の推薦状あったし、入社はまだまだ先だし、半分遊んで来たようなもんだったぜい」

渥美は首を振って、右手の人差指で会議用の長机の方を指し示す。

鏡花は机の上に置かれたパンフレットに目を向けた。

パンフレットの表紙には、三人称視点のゲーム画面イメージがいくつか並んでいる。巨大なモンスターや荒廃した都市が描かれた画面イメージの下には、ゲームのタイトルが書かれていた。

「ふむ、“ドラゴンズ・ワイルド”の新作……って、開発会社ここだったんですか」

「初代は別の会社だったんだけどな、そこが潰れて、権利関係を買収したとか。知らなかったんね」

「タイトル知ってる程度ですもん。アクション苦手ですもん」

鏡花は踵を返して部屋の奥に向かいつつ、上着を脱いでハンガーにかける。

「そもそも、いつも研究室に入り浸っててあんまり遊ばんもんね。教授が心配しとったよ」

「それは置いといて。どこまで状況聞いてますん」

話題を変えた鏡花に対して、渥美は拘らずに答えた。

「ざっくり一通り。代行者指定した後、観測機能を使おうとしたらドライバの更新を要求されたんで、今その作業中」

「その代行者さんからの電話ですが、渥美さんの仕業じゃないですよね」

「ちゃうねえ。羽村こそ、夏の日差しにどっかやられた、とかじゃないんよねえ」

作業を続けながら尋ねる渥美に対して、鏡花は首を横に振る。

「履歴に残ってますし、発信者のドメインは“枯渴世界”のサーバ

になっていました」

「羽村と会話が成立したってのが信じ難いのう」
「ですよ」

サーバラックに置かれている私用のノートパソコンの前に座ると、鏡花は上着の袖を捲くつた。

「次はこっちからかけてみるんで、通話のログとれるようにお願いします」

「あいよ……あ、そうそう、羽村」

渥美はスマートフォンにケーブルを繋いでから、鏡花を手招きした。丸椅子を引きずって近付いてきた鏡花に対して、ディスプレイを指し示す。

「代行者選択の後、しばらくしてからこんなメッセージが表示された」

「えーと、“即時対話機能を有効にするため、観測機の時間移動演算を終了します”……んー」

「で、調べてみたら時間経過比が百パーセントになった」

「対話に問題が出ないように調整された、って感じですか」

鏡花は唸りながら丸椅子と一緒に元の位置に戻っていく。

「一応、現状報告ってことで」
「んー。まあ、状況は把握しました」

通信内容を各務研のサーバに保存する処理を追加した渥美は、フ

アームウェアの転送を開始してから、鏡花に声をかけた。

「よし、通信ログおっけー」

「あざっす。観測機能の方はどうですか」

「とりあえず、画像情報なら取れるようになったぜ」

「それ、電話かける前に見ておきたいんで、お願いします」

鏡花は自分の携帯電話を操作しながら、渥美の横に移動する。

「んじゃ、観測開始、と」

渥美がマウスでコマンドを選択すると、画面に新しいウィンドウが展開される。ウィンドウには、携帯用のコンロを挟んで座る二人の人物を見下ろした映像が表示された。

「位置情報からすると時計台の中の筈なんだが、廃墟の中に男が二人か。どっちかが代行者かね」

「カメラさん、もうちょい下からお願いします」

「おうよ。三次元は俺に任せろっつての」

渥美はメニューを選択して補助ウィンドウを開き、数十個並んでいる設定値を次々と変更していく。

「はい登録。画像の更新は一分ごとだから、しばし待たれよ」

「いやー、三次元マニアの渥美さんが居なかったら大変でしたー」

「はっはっは、そう褒めるな」

「……」

映像が更新される。座っている二人の横顔が、焚き火に照らされている。

「若い男と無精髭のおっさんか。ずいぶん暖かそうな格好だな」
「おっさんの方は食事の準備中ですか」

鏡花はそう言っ、地面に置かれた鍋や皿を指差した。その指が
焚き火の反対側に動き、少年の手元に差し掛かったところで止まっ
た。

「この赤いの、ウチのコレじゃないですかい」

鏡花の指はディスプレイから離れ、充電器に設置されているモノ
を示す。

「んー、解像度低くてよく見えんな。まあ、スマートフォンつぽ
い、か」

「わざわざ再現するとか……こんな仕掛けが、未来予測システムに
存在する意味とかあるんですか」

鏡花の疑問に対して、渥美はこめかみに右手を当てて考え込む。

「正確な予測を得るためには、ある程度のミクロ要素は必要、とか
……ってか、そもそも携帯電話をインターネット接続の端末として
選ぶこと自体が想定外なんじゃねえの。十五年前のシステムっしょ」
「あー、まあ、そうかもですけど」
「それよりもほれ、電話待ってるみたいだぜ」

更新された映像の中の少年は、頬杖をつきながら手元を眺めてい
る。

鏡花は考え込んだ姿勢のまま、サーバーラックに掛かっている丸時
計に目を向けた。

「あー、そろそろ時間か……うーん、現実感溢れる振る舞いが、逆に非現実的すよね」

「なんつーか、手の込んだドッキリを仕掛けられてる気分になってきたわ」

「mira兄イが大成功のプレート持つて外で待つてたりですかい」

鏡花の携帯電話から通話発信が行われると、充電中のスマートフォンの表示が着信中に切り替わる。しばらくして更新された観測画面には、慌てた様子で何かを言い合っている二人の姿が写っている。

「着信応答の方法がわかんねーとか、そういう小芝居はいらねー」

画面を眺めていた渥美が力なく呟く。十数秒が経過して、携帯電話の呼出音が途切れた。

『……こ、これでいいのかな』

「はろーはろー。聞こえるかい」

『はいはい、聞こえてる』

渥美は事前に起動していたツールを前面に表示させ、ログの取得状況を見て頷いた。

「ちゃんと取れてるな。俺はちよいと通信経路辿ってみるぜ」

「はいな……さて。改めて自己紹介しようかね」

携帯電話のマイク部分を手で押さえて返事をしてから、鏡花は話を続ける。

「えー、私は野幌情報大学各務研究室特別研究員、羽村鏡花。本業

は別だけど、今は貴方達について調べてるところ」

『国家公認二級開拓士、クロス・リユート。依頼により、北方無人地域の冬季調査と発掘品の収集任務を遂行中』

鏡花は左手で眉間を揉む。更新された映像では、少年の視線を受けた無精髭の男が両手を広げて肩をすくめている。

「よくわかりません」

『右に同じく』

「……んー、ヘッドセットどこだっけな」

会話の内容を聞き取ろうと静かに横に立っていた渥美は、諦めて机の引き出しを漁り始めた。

「細かいことは後で聞くとして、隣の無精髭な方はどちらさまでしようか」

『こっちは師匠のセキ。探索に同行してもらってる。って、ああ、こっちが見えてるのか』

「観測するのが目的なんだから、当然なのです」

『そうか』

「んじゃ、次。黒須君たちが今いるのは時計台の中かな」

『多分。塔の中に見えるのが振子時計の機械なら、だけど』

「ちよっと待ってね」

鏡花は携帯電話を離して、ヘッドセットを準備していた渥美の肩を叩く。

「時計台確認できますかね」

「やってみよか」

渥美が座標値を変更している間に、鏡花は話を再開した。

「さっき北方無人地帯って言ってたけど、誰も住んでないのかい」

「いや、全く住んでないってわけじゃないな。半島の先にある開拓民の街とか遊牧民とか」

「何か危険でもあるとかかしらん」

「大昔の戦争の影響で人が住めなくなってる場所も一部にはあるが、一番の原因は“陸竜”だな」

「リクリューって何ぞ」

「ドラゴンポケモンか何かじゃねーの。てか、いちいち一分待たないと更新されねーって結構面倒だな。改造できねーかな……」

観測位置を調整していた渥美が呟く。画面には雪の積もった瓦礫の山が表示されている。

「あれ、説明が必要か……陸の竜と書いて“陸竜”。既知の魔獣の中でも最大級、何百年も前から北方一帯を蹂躪していて、それを止めることも傷つけることも叶わない。こいつのせいで北方は放棄されている、ってところか」

「……パネエ千年後きたア……」

「どうした、キョー力」

「んにゃ、何でもないよ」

一瞬会話が途切れた後、通話の相手が話し始める。

「こっちからも質問していいか」

「どうぞどうぞ」

それもそうだ、と鏡花は頷く。渥美は検索サイトから地図を開いて、座標値の調整が続けている。

『俺は代行者に選ばれた、ってことでいいんだよな』

「うん、まあ、そうすね」

『記録によると、代行者は与えられた役割を果たす代わりに“術式”という世界を変える力を行使できた、ってことになってるんだが、合ってるか』

「どうしてそうなった」

『違うのか』

「世界を変える力、ねえ。そんな大それた……って、何ですか渥美さん」

否定しようとした鏡花の服の袖を、渥美が引っ張り、口を開いた。

「“事象改変モジュール”のことじゃね」

「……ああ。そんなのもありましたね」

「使えるのは管理者だけで、観測者アカウントでは無理っぽいんだがな」

マウスカーソルを動かして、メニュー画面で灰色表示になっている部分を示しながら、渥美は続ける。

「モジュールそのもののデータはクライアントプログラムと一緒に入ってたから、羽村の解析能力に期待するぜ」

「うへえ」

鏡花は首を振ると、通話に戻った。

「その力については、ちょっと何とも言えない状態かな。黒須君にはまたいろいろ聞かもしれないけど、今のところは特別やつてもらいたいことはないよ」

『そうか』

「他には何かあるかな」

『質問というか、ひとつ頼み事があるんだが。この“代行者の証”

……あー、この赤い機械というか、装置というか。こいつをどう使えばいいのか、教えてくれないか』

04 “夜警”

崩れた屋根の隙間から見える空は、紅く染まり始めている。数時間前まで空を覆っていた雲は、東の方角に流れていた。

時折、保温のために立てている布の隙間から、冷たい風が入り込んでくる。

焔炉の上に置かれた鍋からは、食欲をそそる匂いが漂ってきている。

『カメラはそんな感じとして、んー。黒須君、キーボードはわかるかい』

「いや、わからない」

クロスは首を振って、何回目かの同じ答えを返した。

『ならメールの説明は追々として、アプリ……もなあ。乗換案内あってもだし、二次元バーコード読めてもだし、ブラウザあっても検索できなきゃだし、渥美さんのはネタアプリばかりだし』

「……キョーカ、ひとまず“カメラ”だけでいい。これ以上聞いても、理解できそうにない」

『ふむ、確かに。今日のところはここまでにしておきますかね。他に質問があれば一旦切るよ』

「ああ、大丈夫だ」

『ん。じゃ、またね』

その一言を最後に“代行者の証”は沈黙する。

途中から食事の準備を再開していたセキは、クロスが“証”を耳に当てていた手を下ろしたことに気付いて声をかけた。

「お疲れさん」

「いえ、大丈夫です。しかし、およそ“神託”とは言い難い内容でしたね」

「全部聞こえてたわけじゃねえし、聞こえた部分もほとんどが理解の埒外だったが……“観測者”じゃなくて本物の人間が喋ってんじやねえのか、って思っちまうよ俺は」

その言葉にクロスも同意する。“証”を脇に置いた右手は側に置いてあった背負い袋に伸び、水筒を繋げていた止め具を外した。

「何にしても、街に戻る予定は変えずに済みそうです」

「そいつぁ良かった。で、今度は何をやっとするんだ」

クロスは水筒を地面に置くと、再び“証”を手にとって操作し始めた。

「裏側の“カメラ”で目標を捉えて“撮影”、と」

クロスが水筒の上に“証”をかざした後、表面に水筒が映っていることを確認し、“撮影”の文字に触れる。

“証”から軽快な音が鳴り響いた。

「で、“データ”から選ぶ、と……」

続けて“証”を操作すると、彼が撮影したばかりの水筒の幻像が、“証”の表面に浮かび上がる。

その様子を横から眺めていたセキが、ほう、と感嘆の声を上げる。

「機械だから寸分違わず、とは思ってたが、飛び出してるように見えるってのはどんな技術なんだろうな」

「“術式”を使うときに出てくる魔法陣と似たような感じなのは」
クロスの推測に対して、セキは鍋に乾麺を放り込みながら否定する。

「いや、多分違うな。魔法陣は星界に描かれた式が光として認識されるわけだが、こいつは機械が放つ光を上手いこと調整してる感じだな」

セキが手を拭いていた布を“証”を覆うように被せると、幻像は見えなくなる。布を除けると、幻像は再び現れた。

「……なるほど。“術式”なら、遮るものがあっても消えることはありませんね」

セキの話に対してクロスが口を開いたとき、“証”から音が鳴り響いた。

「また呼び出しかよ」
「いえ、違うみたいです。“新着メール”……手紙ですかね」

セキに見せていた“証”を手元に戻すと、クロスは回転する手紙の幻像に触れ、表示された文章を読み上げる。

「“食事終わってからでいいから、水筒以外のものもいろいろ撮影しておいて”だそうです」

セキは杓子で鍋をかき混ぜていた手を止め、廃墟の片隅にまとめ置かれた荷物に視線を向けた。

「ふむ……いいんじゃないか。調査記録を写真として残せば、後で報告書を書くのにも使えそうだしな」

食事を終えた後、セキは発掘品の袋の一部を持って建物の外に出て行った。

クロスは食器と鍋を洗い、探索時に持ち運ぶものとは別の麻袋に片付けていた。

「明日は朝から移動だから、探索用の道具袋はもう使わないか。炭はあと半日分出しておいて……」

焔炉の状態を見ながら夜番の準備を始めたクロスは、洋灯ランタンの油に火を点け、保温と雪避けのために立ててあった布の位置と高さを調節する。地面の上に布と道具を広げ、抜き身のまま置いてあった片手剣の手入れを始めたところで、セキが戻ってきた。

「どうでした」

「周りも車も異常なし。ってなわけで先に寝るぜ」

セキはそう言って毛布を体に巻き付けると、焔炉の近くに座って目を瞑った。そちらには目を向けず、クロスは手入れを続ける。残っていた脂と水気を拭き取り、大きな刃毀れが無いことを確認して鞘に戻す。同じように短刀も手入れした後で、拳銃ホルスター囊から“銃”を取り出して布の上に置いた。

クロスが銃身に刻まれた装飾の一部に親指をかけて滑らせると、小さな鍵穴が現れる。道具箱から取り出した鍵を鍵穴に差し込んで捻り、銃身カバの外装を取り外した。

「そう簡単には壊れないとは言え、傷が入ってたりしたら良くて不発、悪くて暴発。慎重に……と」

銃身の内部に収められていた銀色の細長い棒の表面は、小さな記号が隙間無く刻み込まれている。記号は螺旋を描くように並んでおり、クロスは棒を回転させながら、緑に着色された不凍油を挿していく。

一通りの手入れが終わった後、銃身の外装を戻そうとしたクロスは、その手を途中で止める。

「ああ、これも撮影しておくかな」

止めた手は“証”を掴み、撮影機能を選択していく。“銃”の内部を何度か撮影してから、今度こそ外装を取り付けた。

「後は……折角だから、この廃墟についての資料も残しておきたいな」

クロスは“銃”を右脇に収め、“証”を持って立ち上がる。

瓦礫の隙間を抜けて広間の中央まで歩くと、夕方まで雪を降らせていた雲は完全に消え、月と星の光が周囲を照らしていた。

“証”を操作して、屋根の隙間から見える時計台に焦点を合わせると、肉眼で見えるよりも明るい映像が映し出された。クロスはそのまま撮影を行い、結果を確かめる。

「月明かりでもこれだけはつきり再現できるのか……偵察にも使えるそうだな」

明日また撮影しておこう、と呟きながら、クロスは空を見上げる。星が輝く天頂には、赤紫色のオーロラが幽かに揺らめいていた。

「よし馬鹿弟子よ、そろそろ起きろ。飯食ったら残りの荷物を積み込むぞ」

「了解……す」

夜中に火の番を交代したセキは、夜明け前に食事の準備を終わらせてから、クロスを叩き起こした。二人は食事をしながら、行動予定を話し合う。

「行きと同じ経路で帰るとして。途中でエンヤの宿に寄り道しても、年が変わる前には街に戻れるな」

「予想以上に車輪タイヤの調子が良かったですね」

「ああ。正直なところ、ここで正月迎えるつもりでいたから……そういや、“証”が見当たらないけど」

「無くしたら洒落にならないんで、紐付けて首から下げて中に入れてますよ」

携帯食糧を食べ終えたクロスが、首元から紐を出して見せた。

「なるほどな」

空が少しずつ白み始める中で野営地の片付けを終えた二人は、荷物を持って廃墟から外に出て、裏手に回り込む。そこには、灰色のシートがかけられた、二人の乗り物が置かれていた。

荷物を地面に置いたセキがシートを除けると、中から年季の入った枯草色の車体が現れる。本体である二輪車の左側には側車を取り付けられており、それぞれに用意された後部収納に荷物が詰め込まれていく。

「帰りもよろしく頼むぜ、相棒」

クロスが地図を持って側車の座席に座ったことを確認して、セキは二輪車に跨って命令の言葉を発した。

「“点火”」

後輪に直結した術式駆動機関が魔法陣の輝きに包まれていく。十数秒の展開時間を待つ間に、クロスは思い出したように“証”を取り出した。地図を広げて撮影した後、彼は運転手に声をかける。

「師匠、時計台を撮っておきたいんで、正面で一回停めて貰えますか」

「おうよ」

防寒具の胸元を留め、風避けの眼鏡ゴグルをかけたセキが答える。

彼が二輪車の把手ハンドルを握る右手を動かすと、駆動機関から低い金属音が響き始める。

南東の空から差し込み始めた朝の光を受けながら、二人を乗せた車は少しずつ前進を始めた。

05 “術式”

日曜日の朝。それなりの広さのアパートの居間で、鏡花は朝食の準備をしていた。

「朝御飯入らないんならこれだけ飲んで」

「すまんね、きょーちゃん」

寝不足気味の同居人の前に野菜ジュースの入ったコップを置く。各務教授はコップの中身を少しずつ口にしながら、前日に印刷された数枚の画像を眺めている。写っているのは、革に包まれた水筒に、分解された拳銃、そして、星空を背景に廃墟と化した時計台。

「スマートフォンのカメラ機能を使って“枯渴世界”を撮影、ねえ」
「まあ、信じられないよね。渥美さんは外部からのクラッキングの痕跡を探すって」

鏡花は別の紙を教授の前に置いた。夕暮れ時の廃墟を写した細長い画像が、縦に二段並んでいる。

「で、こっちがクライアントで観測したパノラマ映像。こっちの方が画質悪いのは、プログラムが古いかから仕方ないかな」

「実物では不可能な視点に、模型では有り得ない広さか。本物のシミュレータか偽装したものかとはともかく、現実のものではなさそうだね」

そう言いながら、教授は画像の上を指でなぞっていく。

「高層ビルは全滅かな……この一番近くにあるのが時計台だとする

と、その先に見えるのが市役所か」

教授の前に置かれていた朝食の皿にラップをかける鏡花に対して、教授は問いかける。

「あとは“陸竜”と“術式”だったかな」

「管理者が“事象改変モジュール”を使って引き起こした自然現象や事件とかが、そういう名前で残ってるのかもなー、とは渥美さんの談なのです」

「ただ観察するだけでも対象に影響を与えてしまっわけだし、干渉によって新たな概念が生まれることも有り得るか」

ふむ、と、教授は印刷物から顔を上げて考え込む。朝食を冷蔵庫に入れた鏡花は、荷物をまとめながら口を開く。

「そんなわけで、今日も引き続き調査しようと思うんだけど、みらい兄イはどうするかい」

「そうだなあ。もう少し休んで、酒が抜けたら様子を見に行くよ」

「お、鍵開いてる。お疲れれーす」

会議用の長机の奥に椅子を並べ、その上で寝ていた渥美が、研究室に入ってきた鏡花に左手を上げて生存を知らせた。

「おはようさん。不正アクセス見つからなかったア」

「黒須君の銃の方はどうですかい」

「そっちはばっちり。画像になんか余分なデータが付加されてるのが気になるんだけどな。共有にモデルデータ置いてあるから、見と

き……」

そこまで言って、渥美の左手は力尽きて垂れ下がった。

「頭すげえ残念ですよ」

「ああ、説明会行くのにセットしてたからなあ。仕方ねえな、まだ眠いが一旦帰るか」

長机に肘を乗せて起き上った渥美の横を通り過ぎ、鏡花は共用マシンの前に座ってディスプレイの電源を入れる。マウスを操作し、デスクトップにあったモデルデータを選択した後、並行して“枯渇世界”のクライアントプログラムも起動させる。

最初に表示されたウインドウには、スマートフォンのデータフォルダに保存されていた銃の画像から、渥美が再構築した三次元情報が表示される。

銃の内部にあった細長い棒状の物体は、本体とは別に再現されていて、表面に刻まれている記号も鮮明化されていた。

「この棒が銃弾ってことはないだろうから、やっぱり記号に何かの意味があるのかな」

「それ、トリガー引くと回転するようになってるみたいだぜ」

ハンガーに掛けてあったネクタイを鞆に放り込み、スーツに袖を通しながら話す渥美に対して、鏡花は思いつきを口にした。

「宗教的なものかな。お経とか。マニ車みたいな」

「平面に広げた画像も作ってあつから、先輩の言語認識プログラムに放り込んでみるとか。まあ、使い方は持ち主に直接聞くのが一番早いんじゃないね」

そこまで言って、渥美はドアノブに手をかける。

「んじゃ、また後でな」

「いつてらっしゃーい」

渥美が研究室から出て行った後、鏡花はクライアントから観測機能を起動し、ディスプレイに貼り付けられたメモを元にカメラの座標を設定する。

「さーて、本日の黒須君はー」

数十秒後、新たに表示されたウィンドウの画像を見て、鏡花は自分の鞆から携帯電話を取り出した。着信履歴から一番上の番号を選んで発信し、呼び出し音の鳴る携帯電話を耳に当てる。待つこと十数秒。

『キョーカか』

「エネルギー資源枯渇したって設定はどこ行った」

『いや、だから、意味がわからん』

「黒須君が乗ってるそれについての説明を要求するのです」

画面には、サイドカー付きのバイクに乗って雪原を走る二人の姿が映し出されている。鏡花は肩で携帯電話を支えながら、キーボードを操作して画像を保存した。

『師匠、この車の説明をしてってくれて……え、いや俺よく知らないし。って、何でそんなに嫌がるんですか』

「……黒須君、わかる範囲でどうぞー」

並行して銃のデータを表示させながら、説明を促す。

『えー、型番は、五七式側車付自動二輪車。三年前に師匠が手に入れたから、無人地帯の調査用にいろいろ改造してある』

「動力源は油とか電気とか言わないよね」

『油で動く車なんて三千年紀の遺物だろう。電気だって都でしか使われていないじゃないか』

更新された観測画面には、停止したバイクと、その横で点検を行う無精髭の男、そして、サイドカーに乗ったまま携帯電話に向かって話している少年が映っている。

「ふむふむ。じゃあ何で動いてるんですかい」

『そりゃまあ、術式駆動だけど』

「……そこんともう少し詳しく」

『大昔に“代行者の証”を持つ者が“資源戦争”中に起こした様々な奇跡、その原理を解析して模倣したものが“術式具”だ』

「資源戦争……あー、資源枯渇のために起こしたイベントがそう呼ばれてるのかな」

クロスの説明を聞きながら、鏡花は“枯渇世界”の資料をチエツクし始めた。

『開拓者や狩猟者、特定技術者のような国家資格を持つ連中にだけ与えられ、それを使えることが身分の証明になる道具。けれども、現実には起こり得ない現象を引き起こすための力の源泉、カミオカの世界干渉機については、ほとんど解明されていない。故に、多くの地域では魔法の道具のような扱いをされる場合もある』

「胡ッ散臭いなあ」

肘をつきながら呟いた鏡花に対して、通話の相手は呆れた声で答える。

『俺にとってはこの“証”やキョーカの方が胡散臭いぜ。“術式”について、何でキョーカが知らないんだよ』

「まあねえ」

『話を戻すぞ。“術式具”を使うために必要なのは、そこに“術式”があるんだという認識だけで、魔力とか精神力とか、そういった資質や能力が必要なわけじゃない』

「ふむ」

『“術式具”を起動すると、それに刻まれた図式を干渉機が変換して、実際に効果のある魔法陣として展開する工程が始まる。その後、発動命令を意味する“動作”によって、魔法陣は“世界の情報”を書き換え、現象を引き起こす、ってわけだ。しかし、そうやって無理矢理書き換えた“世界の情報”は、長くて十数秒で復元されてしまっ』

「んーあー、待って待って。結局のところ、そのバイクも銃も、大昔に代行者が使ってた未知の力を再現したものってことかい」

鏡花は眉間にしわを寄せながら、情報の整理を行い始めた。

「“枯渴世界”側からこつちのシステムに介入して“事象改変”を実行する、とか。スマートフォン各務研カスタムのももあるし、不可能ではなさそうかな……」

『キョーカ、そろそろ車動かしたいんだが』

「あー、ごめんごめん。移動しながら話すのは無理なのね」

思考の海に沈もうとしたところを呼び止められた鏡花は、一旦推

論を棚上げして、会話に戻る。

「で、お二人さんはどこまで行かれるのですかい」

『キムントの温泉宿に寄って街に戻る予定だ。今日中には宿に着けないから、今夜は野宿になる』

「ふむ。ちなみにその街はどこにあるのかな」

『ここから南西、半島の先端にある。半島の奥までは“陸竜”もやってこないからな』

「ふむふむ。渡島半島の先ってことは、函館辺りかい」

『ああ、ハコダテで合ってる。地名は分かるのか』

通話相手の疑問に対して、鏡花は検索エンジンの結果を見ながら答える。

「変わっちゃってるのもあるみたいね、洞爺湖とか。ああ、でもこれは戻ると言った方がいいのかな……」

『キョーカ』

「あつと。質問は以上で御座います。雪道気をつけてね」
『了解』

通話終了のボタンを押した後、鏡花は携帯電話を置いて、両手を上げて体を伸ばした。

「んー。銃の解析を先にするか、“事象改変モジュール”を見るのが先か……」

両手を伸ばしたまま左右に揺れ始めたところで、研究室のドアが開く。

室内に入ってきた佐々木は、右手を上げて鏡花に挨拶した。

「おや、渥美君かと思ったら、鏡花君か。今日は早いのだよ」

「んあー、おはようございます。佐々木さんこそ、日曜日ですよ」

彼は自分の席に鞆を置き、マシンの電源を入れる。

「明日から教授と東京だからさ。発表の最終確認」

「なるほど」

「あと、昨日の奴がどうなったのか気になってね。どんな状況なのさ」

「いろいろあり過ぎてどこから話せばいいやら。とりあえず、観測機能は動作しました。千年後の時計台は廃墟でした。なんか竜とか術とかあるみたいです。動力源不明のバイクが走ってます」

「むむむ」

唸りながら共用マシンの方に歩いてきた佐々木に対して、鏡花は教授に見せたものと同じ画像と、雪道を絶賛走行中のバイクの現状を見せる。その後、別のウィンドウを開きながら、鏡花は言葉を続ける。

「でもって、佐々木さんにぜひ解析して頂きたいのがこちら。“枯湯世界”の内部からサーバに介入して“事象改変モジュール”を動かすという、謎の未来文字でございます」

ウィンドウには、銃の内部に刻まれた記号の平面画像が表示されている。

「あー。中の人的には、自我を持った人工知能の反乱という方向で話を展開したいのかな。もしくは、解けた人にはご褒美にネタばらし、いや腹筋とか」

「まあまあ、そう疑ってかからずとも」

「この年になると疑り深くなるのさ。それ、メールで送って」

そう言っただけ自分の机に戻った佐々木は、デスクトップのショートカットから言語認識プログラムを起動し、受信メールから保存した画像を読み込む。画像の傾きを調整すると、個々の記号を分割する青い升目が表示され、記号をなぞるように赤い線が引かれていく。

そして、認識を完了した記号が、類似する形状ごとに次々と分類されていく。

「文字種多いかと思ったら、これ、二文字の組み合わせでひとつの記号なのさ」

経過を眺めていた佐々木が、分類された記号を手で並べ替えていく。

「文字の数は十六。組み合わせは最大二百五十六。でも、半分しか使われてなさそう、だな」

誤認識された記号を修正して、単語のパターン抽出のプロセスに移行する。番号に置き換えられた記号の列が色分けされると同時に、順序が同一となっている部分が抜き出される。

佐々木は過去の研究で解析した文章を別のウィンドウで表示し、パターンを比較していく。

「自然言語じゃないな。経文のパターンとも違う」

小声で呟きながら作業を行う佐々木の横で画面を眺めていた鏡花が、いくつかの記号を指差していく。

「デリミタ、コーテーション、サブスティテューション」

「……ああ、なるほど、プログラムコードか。ハッキングのためのものだから当然そうなるか」

佐々木は鏡花が示した記号に対応する文字を入力した上で、作業を止める。

「となると、今度は“事象改変モジュール”の方を調べてみて……」
「実装されているコマンドを把握しないと、解読の仕様が無い、と」
「その通りなのさ」

「ただいまして……って、何か二人とも煮詰まってるなア」

正午を過ぎた頃、私服に着替えて研究室に戻った渥美が見たのは、机を挟んで揃って頭を抱える鏡花と佐々木だった。

「ドキュメント全部英語だし」

「翻訳頼まれたけど用語が難しすぎるし」

「テストコード書いても観測者アカウントじゃ動かせないし」

ディスプレイを睨みながら呟く二人に対して、渥美は肩をすくめて首を振る。

「先輩も羽村も、プログラムの改造は専門外だっけね……よし」

佐々木の隣の席に座った渥美は、電源が入ったままの自分のマシンでディスプレイを起動した。

「ちよいとクライアントプログラムを弄ってみるから、気分転換に

外でも行つてなさい」

06 “逃走”

時計台を出発してから数時間。クロスとセキを乗せた車は山地を避け、舗装道路の跡を辿って南東方向へと移動していた。

前日まで雪を降らせていた雲は消え、季節外れの青空が広がっている。風は強く、時折吹く突風が降り積もった雪を舞い散らせている。

橋が崩れてしまった川の浅瀬を渡ったところで、二人は車を点検した後に小休止をとっていた。

「道は合ってるよな」

「ええ。目印がちゃんと残ってます。正面の山の間を抜ければ、海に出るまでほぼ平地ですよ」

水筒の水を飲んだ後、クロスは近くに見える低い山並みを指差して答える。

「よし、今日中に距離を稼ぐぜ」

峠に向かう緩やかな登り道の途中で、セキは道の先に大きな障害物があることに気付いて車の速度を落とした。

複数の倒木によって道が完全に塞がれている様子が見えてきたところで、彼は車を右に向けて停止させる。

「こりゃ酷い有様だな……」

車から降りた二人は、倒木の上に登って状況を確認する。道の左

方向から右方向へと倒れた木々が、元は片側二車線だった道路に並んでいる。クロスが足元に気をつけながら左右を見渡すと、倒木は道を横切るように、まっすぐ東西に続いていた。

「これ、“陸竜”が通った跡ですね」

倒木は所々で上から押し潰されたように砕けていて、降り積もった雪がその部分だけ窪んでいる。

「正解だ。探索してた何日かの間に、ここを通り過ぎたつてわけだ」
「真新しい跡つて初めて見ましたけど、“銃”で吹き飛ばすのはちよつと厳しそうですね」

道路の幅を超える距離を埋め尽くす木々を見て、セキは腕を組んで思索する。

「迂回するにしても、アレは可能な限り直進するからなあ。少し戻つて、川沿いの木のない場所を進むしかねえか」

クロスはその答えを聞いて車に戻り、座席に置いてあった地図を広げた。

「西側に降りて上流に向かえば、そう遠回りにはならないかな」

「現在位置だけは見失わないようにしねえ、と――」

倒木から降りてきたセキが、言葉を止めて左側の林に目を向ける。奥から聞こえてきた茂みを揺らす音を聞いて、クロスも顔を上げる。

「狐か鹿ですかね」

「それにしても、こつちを警戒する様子がねえし……大きさが違う」

音は少しずつ二人に近付いてきて、それと共に木々の間に褐色の毛並みが見え隠れし始める。

「寝てるところを“陸竜”に叩き起こされたとか」

「ああ、多分正解だ。腹減らせて気が立ってるな。今の装備じゃ倒すのは難しい。逃げるぞ」

剣に手を伸ばしたクロスを止め、セキは車を始動させる。駆動機関が静かに輝きを増していく間に、林の中から襲撃者が姿を現した。四足の状態でクロスが見上げるほどの巨大な槌熊は、車に乗り込んだ二人を見つけて唸り声を上げる。

「よりによつて変異種かよ。“銃”を用意しとけ」

「了解です——“装填”」

広げたままの地図を座席に押し込んで銃を抜き、術式を起動させる。車が動き始め、それに気付いた熊も、逃げ道を塞ぐように移動し始める。

「まだ撃つなよ。最初は俺が防ぐ」

熊は道に戻ろうと加速する車の右側を並走し、少しずつ近づいてくる。セキは車を加速させながら左手を把手から離し、拳を握りながら発動命令を唱えた。

「“顕現せよ”」

黒い籠手が青く輝いた後、高速で魔法陣が展開されていく。左手を右脇の下から突き出すように構え、熊が車を止めようと身構えた

瞬間に再び口を開く。

「戦場の盾」

左手の先、車の右側に円盤状の輝きが現れ、鋭い爪による薙ぎ払いを食い止める。予想外の衝撃に熊は体勢を崩し、両者の距離がわずかに開いた。体を捻って後方を狙っていたクロスが、障壁が消えた瞬間に“銃”を放つ。圧縮された空気の弾丸が熊の首元で弾け、仰け反らせた。

「やつ……てないすね」

体勢を立て直して再び追いかけてきた熊に対して、クロスは再装填を待ちながら狙いをつける。

「当てることは考えるな。手前の地面を狙え」
「はい」

二発目の弾丸は積もっていた雪を舞い上げ、視界を奪う雪煙を発生させた。

驚異的な速度で距離を詰めてくる熊を“銃”で牽制し、“籠手”で防ぎながら、河原を走り、浅瀬を渡って逃げることに十数分。

「……ようやく諦めてくれましたかね」
「勘弁してほしいぜ、まったく。きっちり準備する時間がありや、いい獲物だったのになア」

元は市街地だった廃墟を走りながら、二人はそれぞれの“術式具”を停止させた。

「ああ、食器割れてっかな。こいつも街に戻ったら分解整備だな」
「師匠、地図がずぶ濡れです」

座席の下から皺だらけの地図を取り出したクロスは、セキが車を止めるのを待って、慎重に紙を広げた。

「不測の事態とはいえ、痛いなこりゃ」

「方位磁石も挟んであったはずなんですけど、逃げてる最中に落ちてしまったみたいで……」

「まあ、仕方ねえ。晴れてるうちに海岸まで南下できれば何とかなるさ。途中で空港跡が見つかれば、本道に戻るだろうしな」

セキはそう言って懷中時計を取り出し、自分の影と時計の長針の向きから方角を判断し始めた。

地図を広げるのを諦めて座席に戻したとき、クロスは着信音と共に震える“証”に気付いて、胸元から取り出して応答した。

「こちらクロス・リユート」

『熊に襲われてたって聞いたけど、大丈夫かい』

どこか慌てたような声を聞きながら、彼は改めて自身の具合を確認める。

「怪我はないが、地図が使い物にならなくなった」

『ああ、やっぱり。そんな感じに見えたから』

通話を行っているクロスを残して、セキは駆動機関に破損が無い

か点検を始めている。

「身体じゃなくて、地図の方の心配だったのか」

『見た感じ普通にしてたしね。で、地図なんだけど、なんとかなるかも』

「なんとか、って、復元できるのか」

『朝、カメラで撮ってたでしょう。ピンチアウト……えーと、指を広げる動作で拡大表示できるから、それで行けるんじゃないかい』

「ああ、なるほど……。その手があるか」

『あと、黒須君の現在位置は教えられるから、迷ったら呼び出して……って、明日は終業式か、うーん。位置情報をパラメータにして地図検索に投げれば。そうそう、磁気コンパスで方角測って……あれ、千年後って磁極どうなってるのかな。そこまでシミュレートしてないかな』

「また意味不明だけど、熊に追いかけられない限りはそう迷わないさ」

一人で呟き始めた相手を止め、クロスは言葉を続ける。

「方角はわかるし、地図さえ見られれば問題ない」

『ああ、うん。でもちよっと思いついたから、今夜にでも』
「わかった」

クロスは通話を終えた“証”を目の前に構えて、地図の画像を呼び出した。

画像の拡大、縮小、移動などを一通り試してから、セキの様子を窺う。

「“証”で地図の確認できました。そっちはどうですか」

「そいつは良かった。こっちは陸番管るくばんと拾番管じゅうばんがほぼ死んでるな。

元々調子悪かったところに無理させちまったからな」

待機状態の魔法陣を確認し、不調を訴える部分を停止させたセキは、保護蓋を閉めて立ち上がる。

彼はその勢いで腰に手を当てて上体を反らし、空を見上げた。

「ま、普通に走る分には行けるだろうよ」

07 “歴史”

渥美からの連絡を受けて、慌てて研究室に戻ってきた鏡花が通話を終わらせた後。

「観測機能の変更点は三つ。観測画像の更新間隔を五秒ごとに短縮、複数視点を同時に表示できるように変更、それから画像の自動保存」

サーバラックの横に置かれている冷蔵庫から缶コーヒーを取り出しながら、渥美は説明を始めた。

「飯食ってる間にそこまで進んでるとか」

「さすが渥美さんであります」

右手の指を一本ずつ立てていく渥美に対して、共用マシンに保存された画像を見ていた佐々木と鏡花が合いの手を入れる。

「更新間隔と複数視点は管理者権限の設定を有効にただけやし、画像保存は外部のツール使っただけやけどね」

自分の席に戻った渥美は、四本目の指を立てて話を続ける。

「“事象改変モジュール”のエラーチェック機能は解放できた。けど、実行についてはサーバ側の方でロックされて無理だった」

「うーん。そっちが無理なら、術式の方から攻めてみるしかないか」
「残念なのさ」

右手を下ろしてコーヒーを飲み始めた渥美から視線を戻した鏡花は、俯瞰視点の別の画像を開いて拡大する。画像の中央には、川を

渡ろうとしているバイクとそれを追う巨大な熊が写っている。サイドカーに乗っている少年は、熊に向かって赤く輝く銃を構えている。

「しかし、さすがにこれは釣り画像とか腹筋とか言ってられんのださ」

「そもそもそのエアメールが十五年前のものだし、ここまでの労力を使って偽物を用意する意味とか無いですよ」

「そやね」

佐々木がぼやき、それに鏡花が答えて、渥美が頷く。

「こんなシステムが人知れず稼働し続けてるってのが不気味だぜ」

「未来予測をするためのシステムなんだったら、千年後まで観測せずに、どこかでリセットかけて、条件を変えてやり直すと思うのさ」

「んー。サーバだけ生きてる状態で、誰も知らないまま放置されるとか」

鏡花の推測に対して、二人も思案する。

「あるいは、別の目的でこっそり動かし続けているか。何にしても、まだ大っぴらに話して回らない方が良さそうさ」

「観測を続ける分には問題無いよな……んー、あんまりサーバに負荷をかけるような改造は避けた方が無難かね」

渥美は椅子の背に身体を預けながら、鏡花に問いかけた。

「そうですね。観測機能は現状で良さげですし。私はひとまず、黒須君のためにナビアプリでも作るうかと思うのですよ」

鏡花は立ち上がり、サーバの横に置かれているノートパソコンの前に移動する。佐々木も自分の席に戻り、マシンの電源を入れた。

「じゃあ、こっちは“事象改変”の命令表を使って、術式コードを解読できるか試してみるさ」

「あ、国土地理院の地図から等高線を自動認識して立体表示させるとか、萌えじゃね」

「渥美さんはほんと、三次元なら何でもいいんスね」

「はっはっは、そう褒めるな」

「……」

半眼で渥美を見つめる鏡花は、ふと何かに気付いたように目を開いた。

「そついえば、朝、スマートフォンの画像に余分なデータがくっついてるって言うてましたよね」

「ん、ああ。十数バイトの小さいデータなんだけどな」

「それ、もしかすると“事象改変”で使える被写体のオブジェクト情報かもしれないんで、調べて貰えますかい」

鏡花の発言に対して、渥美は眉をひそめた。

「データ解析は羽村の方が得意じゃんよ」

「三次元座標とか入ってるみたいなんですよう。渥美さんの力が必要なんですよう」

「最初に“枯渴世界”クライアントが各務研サーバに保存した代行者の座標値を取得し、次にその座標値を検索サイトに渡して、戻ってきた地図を表示する。地磁気センサーに同期させた地図回転も考えたけど、面倒なのでパスしました」

「え、もう終わったん」

鏡花から頼まれた追加の改造を行った後、観測画像を元にバイクのモデルデータを作成していた渥美が顔を上げて時計を見る。時計の長針は一周もしていない。

「相変わらずコード書くのは速いよな。バグてんこ盛りだったりするけど」

「はっはっは、そう褒めるな」

「……」

「で、すぐ使わせてみるのかい」

佐々木の問いかけに対して、鏡花は首を振る。

「いえ、どうやら国道沿いに走ってて迷いそうにないですし、トンネルとかがどうなってるか分からないですから」

「そか」

スマートフォンにアプリを転送する処理を実行してから、鏡花は丸椅子を回転させて佐々木の方を見る。

「ただ、このアプリが“枯渇世界”でちゃんと動くようなら、“事象改変”の方も行けるんじゃないかな、と思うわけで」

視線を受けた佐々木は立ち上がり、印刷したばかりの変換表とソースコードをプリンタから拾い上げて、鏡花と渥美に手渡した。

「術式文字の方は、鏡花君の予想通りほぼアスキーコードで変換できたのさ」

「こっちは銃の術式の解説版すか」

「ああ、参考になるかと思って出してみたけど、これがやってるの

は座標とベクトルを計算して、サーバに保存された本体プログラムを呼び出すことだけだったさ」

ソースコードを目で追いながら質問した渥美は、しばらくして諦めたように紙を置く。

「あかん、さつぱり。さすがに独白言語は読めん」

「えー。コボルさんに似ててわりと読みやすいと思うのになー」

「コボルさんて。羽村、お前高校生って設定だったよな」

呟きながらノートパソコンに向き直る鏡花に対して、渥美は突っ込みを入れた。

それから三時間後、各務教授はようやく研究室に顔を出した。

「あれだけ飲んでてぴんぴんしてるというのは、佐々木君はどういう内臓をしてるんだろうか」

まだ幾分か顔色の優れない教授は、自分のデスクで資料を整理している。

「酒弱いもんねえ、みら兄イは」

「というか、明日から東京出張なのに無理せんで下さいよ」

鏡花と渥美の言葉に、彼は呻きながら準備を続ける。

「発表するのは佐々木君だから、僕は大人しくしていればいいんだけどね」

予備の資料を確かめて封筒に収めた教授は、鏡花が淹れた緑茶を飲んでから、左肘を机につき、左手に顎を乗せて三人の方に顔を向けた。

「さて。何か進展はあったかな」

三人が顔を見合わせた後、しばらくして渥美が手を挙げる。

「はい渥美君」

「ヒットダイス十二くらいの熊が出ましてん」

「“枯渴世界”はテーブルトークのシミュレータだったという結論かね」

「……いや、その可能性も無くは無いような……」

考え込む渥美を放置して、教授は右手を振り続けていた鏡花を指名する。

「ではきょーちゃん」

「あつちで術式が発動したときに現れる魔法陣的な光を、『改変回路／オルター・サーキット』と名付けてみました」

「う、うむ」

「術式をソースコードとすると、あれは多分実行形式のバイナリなものじゃないかなー、と。術式の方が一段落したら、次は――」

「佐々木君」

「え、こっちに振られても。……えー、“事象改変モジュール”ですが、基本的なコードの書き方は解明済み。ただ、用意されてる関数が細か過ぎて、何らかの事象を引き起こすためのプログラムをーから組む、というのはなかなか骨が折れそうですね」

「管理者権限が無いと動かせないんじゃないかな」

「その辺は、鏡花君がなんやかんやで」

再び手を振り始めた鏡花を無視して、教授は椅子の背に体を預けた。

「ふむ。みんなの話し振りからすると、不審な点は見当たらないってことか」

「突っ込み所は満載ですけど、うちの情報が抜かれてるってことはねーです。ただ、“各務研カスタム”の各種センサー機能が“枯渴世界”と連動しちゃってるのが謎っすね」

そう言って、渥美は赤いスマートフォンに目を向ける。スマートフォンには手書きの地図の一部が拡大表示されている。

「技術的に不可能ということも無いのさ」

「まあ、バックドア通せば何とでもなりますけど。その情報持つてるのはうちと提供元くらいっすよね」

渥美の視線を受けた教授が、身体を起こして口を開く。

「いや、同じモデルは他所にも提供されているはずだから、そうとも言えないね。研究機関以外にも、アプリの開発会社とかね」

「あ、そうっすか……」

「とりあえずセキュリティには気をつけてもらうとして。“枯渴世界”の話は室外秘でいくよ」

「うっす」

「はいなー」

「それで、その携帯の“向こう側”の持ち主は、今どこにいるのかな」

教授の質問に対して、渥美が答える。

「三十六号を南下中で、海岸線まで出てちょっと進んだところで止まっていますね。もう野営の準備を終わらせて晩飯食っています」

「あれ、そうなの」

「あっちの方が一時間くらい早いんですよ。あと、向こうは冬だろ。日没も早いんだって」

渥美は身体をずらして、鏡花に観測画像を見せる。「画像には、橙から紫に色を変えつつある海と、バイクを風除けに利用したテントが写っている。」

「じゃあ、黒須君が寝ちゃう前に、アプリの話をしとかないと」

「あー、それならさ、ついでに聞いてほしいことがあるのさ」

鏡花が携帯電話を手にとると同時に、佐々木が手を上げる。

「何をですのん」

「“向こう側”の歴史さ」

『……千年前というと、“資源戦争”の頃からか』

鏡花の質問に対して、通話相手の少年は少し考えながら、ゆっくり話し始めた。

『その頃の世界を支えていた様々な資源を巡って、戦争が起きた。資源を求めての争いだったのに、それによって、数年で採掘施設はすっかり破壊され、多くの地域が汚染されてしまったらしい』

佐々木がイヤホンで話を聞きながら、エディタに文章を打ち込んでいく。

『資源が無いことで、物の流れが滞り、設備が動かなくなり、情報が断絶して、文明は少しずつ衰退していった。この国も例外ではなかったけど、早い段階で技術と知識を“都”に集約し、それらが失われないように維持、管理する仕組みだけは作る事ができた』

「えーと、その頃はまだ“術式”が解析されていなかったのかしらん」

『ああ。失われた資源の代用として研究はされていたが、実際に使えるようになったのは、だいたい百年前だ』

“術式”が利用できるようになって、石油や天然ガスを完全に代替できるわけではなく、他の資源も不足していた。前文明の技術から、再現可能な機械を少しずつ増やし、ようやく人々の生活に余裕が出てきたのだ、と、少年は語った。

『それに、復興の妨げになっているのは資源不足だけじゃない。汚染された地域や“陸竜”のような災害級の魔獣がいる場所は手がつけられないし、それでなくても変異種や野獣が再開拓の邪魔になっている』

「“陸竜”ってそんなに手強いんだ」

『ああ。師匠が討伐軍と一緒に戦ったときも、どんな攻撃を受けても無傷で反撃してきたらしい。で、新しい強力な“術式”が開発できるまでは様子見とする、ってのが国の方針だ……奴さえ居なけりやな……』

少年の呟きを聞き、鏡花は少し思案して話題を変える。

「えーっと。他の国はどうなってるのかな」

『無線で連絡をとれる都市はあちこちに残ってる。けれども、調査団からの報告を読んだ限りじゃ、どこも状況は悪そうだな』

「そうだ、きょーちゃん」

地図アプリの説明を終わらせ、携帯電話をサーバーバックに置いた鏡花に対して、教授が声をかけた。

「ほいほい」

「彼に、北天の夜空を撮影するように頼んで貰えるかな。出来れば、時間を置いて複数回」

「いいけど、どうしてですか」

「うん。千年後の星空がちょっと気になってね。渥美君にも撮影を頼んだけど、なるべく画質がいいものが欲しいんだ」

「んー、了解。後で伝えときます」

鏡花の返事に頷いてから、教授は立ち上がる。彼は研究室のドアノブに手をかけたところで振り向いて、口を開いた。

「じゃあ、佐々木君。明日は千歳空港で待ち合わせということではないかな」

「はい、わかりました」

「きょーちゃんも明日まで学校あるんだから、あまり遅くならないように」

「……はいー」

渋々返事をした鏡花に頷いて、教授は研究室から出て行った。

08 “予兆”

水平線から太陽が昇る様子を横目に見ながら、クロスは座席に乗り込む。その左手に“証”を持ち、右手が案内機能を起動する。

「観測座標照合中……照合完了……よし、合ってるな。師匠、準備できました」

「おう」

“証”に表示された地図には道路の線が引かれている。その中で海岸線沿いに右上から左下に伸びている一本が黄色で表示されており、その線上に現在位置を示す赤い十字が点滅している。

「今日も天気良さそうですね」

「そうだな。ムロランの岬に船が来てたら、ちょっと寄って土産でも買っていくか」

「土産、ですか」

起動を始めた車の中で姿勢を整えながら、クロスはセキに聞き返した。

「ああ、エンヤにな。馬鹿弟子が雪狼の毛皮を持っていくってんなら、俺様も差し入れのひとつくらい用意しとかねえと。どうせ、積荷が少しばかり減っちゃったことだし」

そう言って、セキは野宿の跡を振り返る。

飲食店の駐車場だったと思われるその場所の片隅に、粉々に割れた陶磁器の山が出来上がっている。衝撃対策としての緩衝材は用意されていたものの、熊から逃げる際の無茶な制動に耐えられたもの

は、半分にも満たなかった。

「多少割れてるくらいなら、歴史資料的価値とかで何とかなるんだがなァ」

「臨時収入とか欲出さなくても、運転試験任務の報酬があるでしょうに」

「趣味で時計集めてる、お前が言うかよ」

セキは溜息をついて、正面に向き直る。

「まァいいさ、行くぜ」

出発してからおよそ一時間後。車は“陸竜”に破壊し尽くされた市街地を抜け、本道から外れて港湾部へと走っていく。セキは東の方角に遠く見える白い吊り橋を眺めながら車を進め、一隻の小型船が停泊している栈橋の手前で車を止めた。

車を降りたセキは栈橋を歩き、船の方に向かっていく。クロスはそれを見送りながら身体を起こし、周囲を見回した。潮の香りが漂う港に人の気配は無かったが、定期的に整備されている様子が窺えた。

「おはようさん。調子はどうよ」

セキが船に向かって声をかけると、船上に人影が現れた。薄い防寒着に身を包んだ青年は、網を纏めていた手を止めて答える。

「お、やっぱセキさんじゃないスか。運転試験、大丈夫だったみたいスね」

「熊の変異種に遭っちまって、ちよつと大丈夫とは言い難いがな。これからエンヤの宿に寄って帰るつもりだ」

セキの言葉を聞いて、青年は納得したように頷き、左手で額の汗を拭いた。

「いつもお疲れ様ス。そういうことなら、鮭持っていけますかい。姐さんも喜びますぜ」

「なら、二本。ちゃんと金は払うぜ」

青年は網から手を離して生け簀の方に向かい、玉網を拾い上げた。生け簀の中には、明け方の漁の成果たちが泳いでいる。

「今年は船も天気も調子がいいんで、中央の方にもいくらか流せそうスよ」

「そいつは良かったな」

「こうして漁ができるのも、セキさんと姐さんのおかげス。だからお代は結構ス……って言っても無理矢理払うんスよね」

「よく分かってんじゃねえか」

セキは歩み板を渡り、船に飛び乗ってから、懷に手を入れる。

「俺様が居ない間、ハコダテの方で変わったことは無かったか」

玉網を構えながら、青年は少しの間思案した後、口を開く。

「十日くらい前に、中央から魔獣狩りの一団が。二日ばかり馬鹿騒ぎしてから、街を出てったス」

「ふむ……装備はどうだったよ」

「四輪の車と大型の“砲”は見たスけど、どっちも使い込んだ感じ

じゃなかったスよ」

「一級装備ねえ。定住してくれるってんなら、ありがたいところだが……」

青年は生簀から掬い上げた小振りの鮭を締め、雪が詰められた箱に収めていく。

「そんな感じじゃなかったスね。連中、“陸竜”を見つけたら、どれだけ近づけるか度胸試しをしてやるぜ、とか馬鹿なことを言ってたス」

「一山当てようって輩か。自滅するだけなら兎も角、面倒事に巻き込まれるのは御免だぜ」

「そスね」

セキは財布から紙幣を二枚取り出し、青年に手渡した。青年は紙幣を操舵席に置かれた小箱に仕舞うと、魚を入れた箱を持ち上げた。

「はい、まいどス。車まで運ぶス」

側車に腰掛けて水を飲んでいたクロスは、二人が棧橋を歩いてくるのを見て立ち上がり、荷物箱の蓋を開ける。

「おはよう、レンさん」

「うん、クロスも元気そうで何よりスよ。正月はあっちでのんびりスか」

抱えていた箱を荷物箱に入れた青年——レンは、親指で南の方角を指し示す。

「そうですね。どうせなら半月くらい休み、てッ」

「そんな暇ねえよな。昇級試験あるんだからよ」

セキの左拳を投下されたクロスは、頭を押さえてその場に座り込んだ。

港を出て元の道に戻った二人は、海岸線沿いに北西へと進路を向けた。ひび割れた幹線道路は、港を南北に横切る大きな吊り橋の下をくぐり抜けた後、山を避けるように蛇行しながら続いている。

太陽が天頂に差し掛かった頃になって、車は海から離れ、峠越えの道に入っていく。

葉を落とした木々の合間に積雪が見える山々の間を通っていくと、二人の前方に大きな湖が現れた。湖の左奥、北西の方角には、雪に覆われた一際高い山が見えた。

峠を過ぎ、坂を下っていくにつれて、湖の南岸にはかつての街並みが見え隠れし始めたが、長い間に渡って人の手の入っていないそれらは、本来の色と形を失いつつあった。

「また土砂崩れ起きてますね、これ」

車を止め、双眼鏡で目的地を確かめるセキに対して、クロスは右手の山を眺めながら声をかけた。

「ま、湖までは届いてねえし、エンヤの所は大丈夫だろ。しばらく噴火はしない、ってあいつも言ってたしな」

下ろした双眼鏡をクロスに渡しながら、セキは言葉を続ける。

「途中で昼飯にしようかと思ってたが、ここまで来たら宿まで行っ

「ちまつか」

「そうですね」

山道を下り、林の中を通る道を西へと進むと、湖畔に建つ小さな洋館が前方に見えてきた。

赤茶色の煉瓦と漆喰の壁を持つ平屋の建物の前に車が止まると、正面玄関の扉が開き、小柄な中年の女性が姿を現した。

女性は黒い和装に身を包み、底の厚い草履の具合を見ながら、車から降りた二人をしかめっ面で手招きする。

「ほれ、寒いんだからさっさと入んなよ」

「へいへい、ちよつと待ちなつて」

荷物箱から土産の品々を取り出したクロスとセキは、急ぎ足で建物へと向かう。

二人が建物に入ると、女性は扉を閉めて、玄関広間を抜けて応接室へと入っていく。

「元氣そうじゃねえか、エンヤ。変わりはねえか」

「ああ。時期外れの客に困ってる以外はね。どうしたもんか」

エンヤと呼ばれた女性は、暖炉の前に置かれた座椅子に座ると、荷物を置いて後をついてきた二人に向かって笑顔を見せた。

「まアいいや。^{かしまやてい}榎宮邸にようこそ。“陸竜”に潰されてなくて何よりだよ」

指し示された椅子に座りながら、セキが首を傾げた。クロスは暖炉の様子を窺い、脇に積まれた薪を放り込んでいる。

「そんなへまはしねえよ。ってか、わざわざ言うつてことは何かあったか」

「三日前。 “ 陸竜 ” がエゾフジを越えて西に進んでいくのが見えたんよ」

セキは頷く。暖炉からは、新しい薪の弾ける音が鳴り始めた。

「荷物からして、アンタたちは探索の帰りだろ。どつかで鉢合せしたかもってね……ああ、悪いね。適当でいいよ」

暖炉の上に置かれた鉄瓶を手にとったクロスに、エンヤは礼の言葉をかける。クロスは会釈すると、厨房へと向かった。

「本体は遭遇しなかったがな、通過跡にはぶつかっちまった。お陰で酷い目に遭ったぜ」

「そりゃ御愁傷様だよ」

セキは右手で顎鬚をなぞりながら、独り言を呟いた。

「三日前つてことは、そろそろ折り返して戻ってくる頃か」

「放っておけば右に曲がるから、多分エゾフジの向こう側を通るんじゃないかね」

「油断は禁物だぜ。奴がここに向かうようだったら、さっさと退避しろ」

セキに睨まれたエンヤは首を振った。その視線は館の奥、厨房の方を向いている。

「カシミヤ・エンヤはここにしか居場所が無いのさ。十年前はあの子の父親に助けられたけど、次は大人しく諦めるとするよ」

「生きてりゃなんとかなるんだ。諦めさせねえぞ。お前も、馬鹿弟子もな」

エンヤはセキの言葉に答えない。厨房から戻ってきたクロスを見て、彼女は立ち上がった。

「部屋も風呂も好きにしなよ。飯だけは美味しいの用意してやるからさ」

09 “実験”

月曜日。終業式を終え、夏休み中の諸注意が書かれたプリントを受け取った羽村鏡花は、友人との挨拶もそこそこに学校を出た。

鏡花の通う高校から各務教授の勤める大学まで十分の距離を歩き、正門を通り抜ける。

まっすぐ研究棟に向かった鏡花は、鞆から取り出したカードキーで扉のロックを解除しながら、守衛室で弁当を食べていた中年の男性に声をかけた。

「お疲れ様です」

「おや、各務さんとの。今日は早いですね……ああ、そろそろ夏休みですか」

「です」

人の良さそうな守衛が顔を上げ、挨拶を返す。鏡花は頷いて、研究棟に足を踏み入れた。

「ただいまさん」

「あいよ、おかえりさん」

鏡花が研究室の扉を開きつつ挨拶すると、中から渥美の声が応える。室内に入った鏡花は、長机の奥の椅子に座り、両手に割り箸を一本ずつ持った状態の渥美と目を合わせた。

鏡花は長机の上に置かれていた渥美の昼食を手に取り、銘柄を確かめながら、湯気の立つそれを両手で恭しく持ち直して渥美の前に戻した。

「心ばかりの品ですが、どうぞお召し上がりください」
「……これはどうも」

渥美は手を合わせ、インスタントラーメンを胃の中に収め始めた。
鏡花は彼の向かい側に座り、黙ってその様子を眺める。

「欲しけりやもう一個買つてあるぜ」

「や、シーフードはちよつと」

「カレーもチーズも普通のも駄目だろ……てか、何か話があるんじゃないんか」

いつも言いたいことはすぐ言うくせに、と促され、鏡花は口を開く。

「なんとなく思ったんですけど。現実世界で術式駆動機関を再現することって可能なのかなあ、と」

「ふむ」

スープを啜りながらしばらく思考していた渥美は、口を離して考えを述べ始めた。

「普通に考えたら無理だな。しかし、別の理論を引っ張ってくれば、夢物語から机上の空論くらいにはなるかもしれん」

「別の理論というと」

「午前中に昨日の通話記録を聞いてたんだが」

プラスチック容器を長机に置いて、渥美は言葉を続ける。

「“黒須君”は、術式が“世界の情報”を書き換えると言っていた。

仮に“世界の情報”、“識界”、情報次元というものが存在し、それを操作する装置と十分なエネルギー量を用意できるとすれば、一時的に何らかの事象を発生させられる可能性はある」

「仮定ばっかですね」

「まあな、もう少し“枯渴世界”の観測を続けないと。情報が少なすぎるぜ」

「了解です」

鏡花はそう言って立ち上がると、共用マシンの前に移動してディスプレイの電源を入れた。観測画面には、洋風の小さな食堂の中で食事の二人が映っている。

「こつちも昼御飯中とか、もー」

肩を落としてサーバラックに向き直り、ノートパソコンの前に座る鏡花に、渥美は声をかけた。

「ああ、そうそう。画像データの解析、終わってるぜ。羽村の予想通り“事象改変モジュール”のオブジェクト情報と構造が一致した」
「どもですどもです。これでひとつ実験ができます」

気を取り直し、袖を捲る仕草で気合いを入れた鏡花は、コーディングに取りかかった。

数時間後、コーディングを終わらせた鏡花は“黒須流人”との通話を始めた。

『彼女はエンヤ。この温泉宿の主人だ』

赤い携帯電話を興味津々の様子で観察している女性について、通話相手は簡単に説明する。

「縁屋^{エンヤ}、いや、園耶^{エンヤ}かな……んー、まあ、りょーかい。で、本題なんだけど、今時間あるかな」

『ああ、大丈夫だ』

共用マシンでスマートフォン内のデータフォルダを監視し始めた渥美の背後で、鏡花は操作の指示を始める。

「じゃ、昨日と同じように通話状態はそのまま、アプリの選択画面まで進んで下せい」

『ああ』

充電器に刺さったままのスマートフォンの液晶画面は、二人が眺める前で切り替わる。それを見て、渥美は首を振った。

「何度見ても不気味やの」

「で、“案内”の隣に追加した“複写”アイコンをタッチする」

『“複写”だな』

二つ並んでいた立体アイコンが消え、画面には西日の差し込む応接間が映し出された。

『これ、“カメラ”じゃないのか』

通話相手の質問に対して、鏡花は肯定を返す。

「うん。それで何か適当に撮影してみて」

『何か適当に、か……』

スマートフォンの画像がしばらく揺れ動いた後、テーブルの上に置かれていた木製のコップを中心に止まった。しばらくして、画像データがスマートフォンに保存される。

「撮影したら、画面が切り替わるよ」

鏡花の言葉と同時に、スマートフォンの画面が術式コードで埋め尽くされた。観測画像の三人は、一様に身構えている。

『キョーカ、この術式は一体……』

「複写プログラム。魔法陣の発生方法がよくわかんないんだけど、大丈夫かな」

『多分、いけると思うが』

「じゃあ、テーブルの上の何も無い場所に向けてやってみて」

『——“発動”』

その言葉の直後、更新された観測画像に、白い魔法陣の輝きが映し出される。その中心には、少年が持つ赤い携帯電話が見えた。

鏡花は深呼吸して、次の指示を出す。

「ここまではおっけー。後はそのまま、画面を触れば発動するよ」

『……いくぞ』

スマートフォンの表示が再びカメラの映像に切り替わり、一瞬ホワイトアウトした後、堅い物がぶつかる音と共に映像が復帰した。映像には、倒れて中身がこぼれたコップが映っている。

続いて更新された観測画像には、元のコップの横にもう一つ、倒れたコップが現れていた。

「……一発成功かよ」

感嘆する渥美と同様に、鏡花の携帯電話からも言葉が漏れる。

『言葉通り、“複写の術式”なのか』

「うん。対象に応じて動的に変化する“術式”なのさ。だけど、前に黒須君から聞いた話に従うなら……」

二回目に更新された画像では、こぼれた水と共に、倒れたコップは忽然と消えていた。

「こんなもんかな。あんまり使い道無いかもだけど、残しとくね」

『ああ、こっちでもう少し試してみる』

「ほとんどテストしてないから、無茶な使い方は止めといてね」

撮影対象を変えて数回の実験を行った後、鏡花は通話を終了させた。スマートフォンに保存されたデータを共有マシンに転送させながら、渥美は息を吐く。

「はア。何かわからんけど気疲れしたぜ」

「“事象改変モジュール”の解析における大きな一歩前進なんだから、疲れて当然なのですぜ」

胸を張る鏡花に対して、渥美は言葉を返す。

「しかしなあ、小さなコインの複写でも三十秒持続しないとか、微妙じゃね」

「通貨偽造は犯罪なのですよ」

まあ、確かに微妙ですけど、と付け加えながら、鏡花は肩をすくめた。

「昨日の夜空のデータと合わせて教授に報告しとくけど、他に何かあったっけか」

渥美の問いかけに対して、鏡花は首を振る。

「特にないですね」

「じゃ、メール送ったら今日のところは終わりにしようぜ」

「えー、まだ夕方ですよ」

渥美は立ち上がって移動すると、鏡花の頭を軽く叩いた。

「放っとくと遅くまでいるだろ。教授から羽村のお守り頼まれてんだよ。帰って宿題やるとき」

「夏休み、明日からなのに……」

10 “発見”

エンヤの宿で一晩を過ごしたクロスとセキは、翌朝早くに出発した。

峠を越えて海まで戻り、北西にしばらく進むと、道路は少しずつ山地へと入っていく。道の先、切り立った山肌にトンネルの黒い穴が見えてきたところで、セキは速度を落として身を乗り出した。

「おっと、そろそろか」

「ええ。ここからは山道ですね」

クロスは“証”の案内機能を終了させ、手書きの地図を表示させる。

「左側、赤い布を巻き付けた標識が目印です」

そう言った直後に、クロスは右手を対象物に向けた。

「あれです」

「よし」

道路の中央付近を走っていた車が向きを変える。錆びついた防ガードレール柵の間を通って、歩道の段差を超えて細い山道に入っていく。

葉を落とした木々の間にある程度進むと、山道は海に面した斜面に沿うように右に曲がる。クロスが側車の左側を窺うと、路肩に積まれた石垣のはるか下方に波飛沫が見えた。

「この道も、きっちり整備、して貰いてえ、なア」

小石や枝を踏み飛ばしながら進む車に揺られ続け、セキは愚痴をこぼした。

「ま、“陸竜”がどうにかならねえと、いつ潰されるか、わかんねえんだけどよ」

クロスは無言で頷く。“証”を持つ彼の左手に、少しだけ力が込められた。

ふたつ目の隧道を迂回する山道の途中、少し開けた場所で、二人は休憩をとっている。

宿を出る際にエンヤから渡された弁当の包みを開けつつ、クロスは“証”から聞こえる声に耳を傾ける。

『やっぱり、トンネルは塞がっちゃってるのね』

「だから、船を使う方が楽なんだけどな。そうやって誰も通らないと、荒れちまうから」

『なるほど』

霧がかった海を眺めながら、クロスは握り飯を口に運んだ。

『でも、車や船が作れるなら、飛行機も行けそうなんだけど』

「師匠が言うには、出力が足りないんだってさ。“術式”を重ねていけば理論上は行けるはずなのに、ある程度以上に増えると“術式”が起動しなくなるらしい」

『キャパシティの問題かな。並列処理できる数に制限がかかっているとか』

「気になるなら、中央に戻ったときに詳しく聞いてみるよ」

ぜひお願い、という通話相手の言葉を聞きつつ、干し肉をかじる。

『そういえば、“複写”の実験はどんな感じだったかしらん』

話題を変えた通話相手に対して、クロスは前日の夜の記憶を引っ張り出す。

「水を入れた湯呑みで何度か試してみた。水の量を変えると、複写された湯呑みに入っている水の量も変わった」

『つまり、複写した時点の状態は完全に再現される、ってことね』

「あと、複写した短刀で薪に傷をつけてみたが、傷は残り続けたな」
『複写した品物が消えても、与えた影響は残る、と。ふむ——』

通話相手が考え込み始めた気配を感じて、クロスは水筒に伸ばしていた手を止め、口を開いた。

「で、実験の後に師匠と姐さんと相談したんだけどさ」

『——ん、何かな』

「俺たちが中央に戻って直接報告するまで、この“術式”や“証”については秘密にしておきたいんだが、問題ないか」

『あー、うん、そうだね。確かに、大っぴらに話をする前に、きちり調べた方がいいと思うよ』

山道は長く、日が傾き、空の色が変化し始めた頃になってようやく、二人を乗せた車は山地を抜けて麓へと辿り着いた。

再び舗装道路を走り、南方に前文明の市街地を望む高台まで移動したところで、セキは車を止める。

「毎度のことですけど、やっぱり厳しいですね」

「今日はもうこの辺でいいだろ」

把手から両手を離し、手首を振りながら、疲れた声でセキが言う。
ハンドル

“証”で地図を確認していたクロスは、顔を上げて口を開いた。

「このまま行けばあと一日二日で帰れそうですし、無理に下まで降りる必要は無いですね」

「だな」

「でも、また“陸竜”に起こされた熊とか出ませんか。山が近いですけど」

一日を費やして越えてきた山地を振り返り、クロスは呟いた。

「“陸竜”もどこにいるか分からないですし……」

「もうちょっと暗くなれば、オーロラで分かるけどな」

「初耳ですよ」

車から降りたセキが、柔軟運動を始めながら言葉を続ける。

「言ってなかったっけな。奴が通った場所の上空は、丸一日くらい紫色の光が残るんだよ」

それを聞いて、クロスは空を見回し始めた。

「奴に近いほど光は強くなるから、すぐ近くにいるならこの時間でも見えるかもしれねえな、っと」

反らしていた上体を起こしたセキは、南の方角を見つめるクロスに気付いて声をかけた。

「ん、どうしたよ」

クロスは右手を上げ、南東の方角、半島の先を指差した。

「……あれ、夕焼けですか。それとも、オーロラですかね」

側車の前に据え付けられた洋灯^{ランタン}が、開拓者の街へと通じる道を照らしている。

クロスの左手に握られた“証”は、案内機能によって周辺地図が表示されている。

「橋を越えたら左折です。そこからはしばらく直進で」
「おう」

青から黒へと変化した空に変わらず浮かぶ紫色の光は、それがただの自然現象ではなく、危機を知らせるものであることを意味していた。

「なんでアレがハコダテに向かってるんだ」

わずかな光を頼りに車を走らせるセキが毒づく。

「今の装備じゃ注意を引くのも無理、街に先回りして避難させるしかねえか」

「そんな。ハコダテが潰されたら、半島の開拓が……」

「待て、何かいる」

言葉を交わす二人の前方、舗装道路の脇に、焚き火の光が現れた。焚き火の側には座り込んでいる人影がひとつと、四輪の車が見えてきた。

セキは焚き火の近くで車を止め、うずくまっている人影に声をかける。

「おい。生きてるな」

「……ああ」

中年の男が顔を上げ、憔悴した声で答える。

「“陸竜”が街に向かってるってのに、何で知らせに戻らねえんだよ」

「車が動かねえんだ。若いのもはぐれちまったし、街に戻ったってどうせ……」

呆れたように首を振ると、セキは質問を続けた。

「大体想像つくが、何やらかしたよ」

男は黙り込む。セキが問い詰めようと腰を上げたとき、四輪車の陰から雪狼の毛皮を被った青年が現れた。

「お前、雇われた案内人か」

「はい……魔獣狩りの新人が、“陸竜”の後ろで“火炎砲”撃ちまってる」

セキは空を見上げ、右手で顔を押さえる。

「で、このザマってか。その新人はどうした」

「向きを変えた“陸竜”に跳ね飛ばされて、行方不明ですわ」

「“火炎砲”も一緒にか……しゃあねえ。なんとか見張小屋まで走って、街に知らせる」

セキの言葉に、青年は頭を下げる。

「お願いします。こいつは俺が連れて戻るんで」

車は再び暗闇を走り始める。側車に座ったままのクロスは、唇を噛み締めた。

11 “解析”

火曜日。午前中に家事を済ませた鏡花は、研究室で“複写”実験の結果を聞いた後、私用のノートパソコンで学校の宿題に取り掛かっていた。

夕方近くになって顔を出した渥美は、共用マシンのディスプレイの電源を入れ、首を傾げた。

「あつれ、テント写ってねえな…… つか、移動してんのかこれ」
「なして」

観測情報を切り替え始めた渥美の横で、鏡花は携帯電話を取り出す。呼び出しから十数秒、通話状態になった携帯電話から、少年の声が響く。

『悪い、キョーカ。今は、急いでる』

通話は切れ、赤いスマートフォンの液晶画面には再び地図が映し出された。

上空からの観測画像に切り替わったウィンドウの中で、ランタンのわずかな光を頼りに、バイクは走り続けている。

渥美はスマートフォンに表示された地図を見ながら、鏡花に現状を説明した。

「内浦湾を回り込んで国道五号を南東に移動中か。昼間ほどの速度は出てないけど、かなり危ない運転だわ。また熊にでも追われてんのかね」

「んー。電話には出そうもないし、何があったかはログ調べるしかないですか」

鏡花の言葉に、渥美は頷く。

「それは任せた。こっちは観測カメラ追加して、状況を確認してみるぜ」

「高度限界三百メートル、視点は下を向けて……ああ、解像度悪い……駄目か」

渥美はぼやきながら、右手で自分の頭を叩いた。暗闇を映すウィンドウの中央に、かすかな灯りだけが見える。

鏡花は私物のノートパソコンで、観測画像を過去に遡っていく。

「夕方からずっと走ってるみたい。旧道を抜けて、一度止まった後、うーん」

上からの画像を拡大させながら、鏡花は呟く。

「黒須君が海の方を指してる。走り始めたのはこのすぐ後かな」

「同じ時間、横からのカメラの画像見せてみ」

渥美の言葉に従って、鏡花は指定された画像を開いた。渥美は振り返ってノートパソコンを覗き込む。

「海というより、空を指してねえか」

「今進んでる方向ですよね……追われてるんじゃないくて、追いかけてるのかな」

渥美は共用マシンに向き直り、観測カメラの数値を調整する。

「高さは維持、視点は南東方向、水平に……何ぞこれ」

暗かった画面に、紫色の光が映し出される。所々に積もった雪や、葉を落とした木々が、淡い光に照らされている。

「……山の向こう側、何か明るくないですかい」

渥美の声に振り向いて観測画像を見た鏡花は、左端の一点を指し示す。紫色の光が一際強いその場所は、橙色に染まっていた。

「バイクがもうちょい先に進むまで待つしかねえな」

渥美はカメラの方角を直しながら、更新される画面に集中した。

それは、巨大な蜥蜴^{イグアナ}だった。

橙色に鈍く輝く鱗に覆われ、背中に黄色い鬣を持ったそれは、山間に建っていた三階建ての建物を薙ぎ倒し、木々を踏み潰している。映し出された画像を見て、渥美が思わず声を漏らす。

「これ……“ニースヘッグ”じゃねえか」

「なして北欧神話ですのん」

首を傾げた鏡花に、同じく首を傾げながら渥美は答える。

「初代“ドラゴンズ・ワイルド”のエクストラ級モンスター。全長百メートル、体当たりやプラズマ球で周囲を攻撃する。高速再生持

ちで、ネットワークを使った軍団^{レギオン}ハントが前提。自分は倒せてねえ」
「……なしてここでゲームの話ですのん」
「知らねえってばよ……」

二人は沈黙する。五秒ごとに更新される観測画像は、バイクの移動と共に離れていく巨大蜥蜴の姿を捉え続けている。

「……黒須君たちは函館に向かっているんですよね」
「五号から逸れてないから、多分な」
「ってか黒須君の言ってた“陸竜”ってアレですよね。進行方向同じですよ。ヤバくないすか」
「このままならな」

再び沈黙。鏡花は丸椅子の上で膝を抱え、膝の上に顎を乗せた。

「どうしましょう」
「まあ、函館滅亡エンドかね」

渥美の背中に右手でパンチを繰り出す。反動で丸椅子が時計回りに回転する。

「黒須君とか、関さんとか、園耶さんとか、困っちゃいますよね」
「“向こう側”の話、だけどな」
もう一度パンチ。回転しながら、左手の携帯電話で新規メール作成。宛先は“黒須流人”。本文を打つ指を止めて、渥美に問いかける。

「“ニーズヘッグ”、倒してみたいとか、思いませんか」
「あー……それは思わんでもないけどね」

渥美は苦笑を浮かべながら、言葉を続ける。

「そこまでやるってんなら、教授の許可と、“黒須君”の協力が必要だぜ」

メールを送信した後すぐに、鏡花は教授の携帯電話に発信した。呼び出し音は数回目で途切れる。

『何かな、きょーちゃん』

「“陸竜”を倒したいのです」

『……いきなりだね。緊急事態なのかな』

鏡花は頷いて答える。

「黒須君が、というか、函館がピンチです」

『うーん……確証が得られるまで、あまり影響の大きいことはしたく無いんだが』

「シミュレータだからって、放つとけないってば」

歯切れの悪い教授の言葉に、鏡花は声を荒げた。数秒の沈黙。

『ふむ。相手が誰であれ、何であれ、助けたいと』

「ここで何もしないのは寝覚めが悪いってゆーか。まあ、何かできると決まったわけでもないけど」

『……時間はどれくらいあるのかな』

鏡花は渥美に視線を向けた。

「正確には何とも言えない。二日は無いぜ」

「一日とちよつと」

『……仕方ない。僕たちはこれから羽田に移動する。空席があれば今日中に戻れると思う』

「え、いや、そこまでは、」

『“枯渴世界”はシミュレータじゃないかもしれない』

鏡花の言葉を遮って、教授の声が響く。鏡花はもう一度、渥美と目を合わせた。

「みら兄ィ、さすがにそれは……」

『きょーちゃん』

「はい」

鏡花は思わず背筋を伸ばした。

『黒須君も、その周りの人たちも、“枯渴世界”も本物だと考えて助けたいと思ったなら、全力でやるんだ』

赤いスマートフォンの液晶画面が切り替わり、彼方に見える“陸竜”を捉えた。

「データ保存中………終わった。確認するぜ」

「あ、はい、お願いします」

『じゃあ、また後でね』

“枯渴世界”クライアントのデバッグツールに“陸竜”のオブジェクト情報を読み込ませた渥美は、腕を組んで考え込む。

「“向こう側”が本物なら、こっち側が偽物かよ………って、ねーな」
「みら兄ィは東京で何か調べてたのかな」

鏡花は教授のデスクに置かれている英語の論文に目を向けた。

「考えても仕方ねえし、今できることをやるだけっしょ」

右手をマウスの上に置き、読み込み完了のダイアログを消して、渥美は作業に取り掛かった。

「オブジェクト名は“Nidhogg-E”。後にくつついてるのは本体のプログラムコードか」

「“事象改変モジュール”の産物ってことで、いいのかな」

渥美は頷く。コード部分を分割して保存した後、鏡花のノートパソコンに送信する。

「“事象改変”のコードを読めるのは羽村と先輩だけだから、解析は任せた。自分は“ニーズヘッグ”の攻略法を当たってみる」

「はい」

日付が変わる直前になって、研究室のドアが開き、キャリーバッグを引っ張りながら各務教授と佐々木が入ってきた。

「ただいま」

「状況はどうなのさ」

「“陸竜”がその巨体を維持するために、十秒ごとにサーバと通信している部分を、《自己再生機構／リジェネレータ》と名付けました」

「貫通力極振り改造の重火器装備した砲手をローテーションして戦

うのが基本っぽいすわ」

「……ちよつと落ち着いて話をしようか」

右手で眉根を揉みながら、各務教授は長机の椅子に座る。荷物を置いた佐々木が隣に座り、鏡花と渥美も移動して対面に座った。

「メールでも伝えた通り、まずは“陸竜”を倒すことが最優先でいいね。僕からの説明は後からするってことで」

教授の言葉に、三人は黙って頷く。

「第一に“陸竜”の解析。コードや性質、行動パターンに脆弱性が無いかどうかを調査する。きょーちゃんがやってるようだけど、どうかな」

「まだ細かい部分は見れてないです。本体は十六の独立した部品をひとつのオブジェクトとして管理していて、行動パターンとかはそれぞれの部品に定義されてる感じ」

「さっき言ってた自己再生機構というのは何かな」

「“事象改変モジュール”を使って生成したオブジェクトは、何もしないと短時間で消えちゃうという前提があります」

鏡花は“複写”を使った際の観測画像のプリントを長机の上に置いた。

「ふむ」

「マニュアルによると、オブジェクトを“枯渴世界”に定着させるための“安定化ライブラリ”というのがあって、普通はそれをオブジェクトに内包する形で生成すればおっけーなんだけど」

鏡花はそこで言葉を区切って、他の三人の理解を待つ。

「ふむ。先をどうぞ」

「“陸竜”の場合、それだけだと大きすぎて自壊するみたいで、サバから本体の形状を呼び出し続けて維持してる感じ」

「はー。えらく泥臭いことやってるのさ」

佐々木が呆れた声を出す。

「今のところ、突けそうな穴とか弱点とかは見つかってません」

ふむ、と教授は腕を組む。

「きょーちゃんも佐々木君と一緒に解析を続けてもらうとして、渥美君の方から補足することはあるかな」

「“陸竜”が函館市街地に到達するのは、およそ四十時間後。代行者のお二人さんは、見張り小屋らしき建物で烽火を上げた後、休憩してます。それから――」

渥美が差し出したのは、“陸竜”の観測画像と“ニースヘッグ”のスクリーンショット。

「外見はほぼ同一。行動パターンも同じだったら、予備動作を元にした回避手順をまとめられるとは思いますが、ゲームと違ってボタンひとつでローリング回避、って訳にはいかんですからね……」

「その辺りは解析を進めながらだね。渥美君にはちよっと休憩していてもらおうかな」

教授の言葉に、渥美は少し思案した後、右手を軽く挙げる。

「なら、ちよっとクライアントプログラムを調整しててええですか」

「ん、何か気になることでもあったかな」

「熊と遭遇したときも複写実験のときも思ってたんですけどね。観測が五秒間隔だと、リアルタイムのやりとりが音声頼りになっちゃうんで、その辺をなんとかしないと戦闘は厳しいかなと」

「なるほど。なら、渥美君はそっちの方向で。みんな無理せずに、休憩をとること」

それだけ言って、教授は席を立つ。他の三人も立ち上がると、それぞれのマシンの前へと向かった。

研究室の窓から見える空が白みがかってきた頃、四人は再び長机に移動していた。

「通常モードでは、休眠期間を挟みながら常に直進。水深が一定以上の海や湖があった場合、十五度単位で右に方向転換。で――」
「ん、おかしくね」

立ち上がって報告する鏡花に、渥美が口を挟んだ。地図を印刷した紙の上を指でなぞりながら、言葉が続ける。

「右折するんなら、函館までは来ないんじゃないかね」

「多分、戦闘モードになったんじゃないかと」

鏡花は手に持っていた紙を、全員が見えるように机の上に置く。

「敵性存在を発見すると、一時的に行動パターンが変化します。各行動の詳細は未確認ですが、ラベルが残ってたんで、そこから推測してチャート化しました」

“方向転換っぽい” “攻撃動作その一” などの単語が記されたいくつもの枠が、矢印で結ばれている。

「あー。んじゃ、攻略動画と比較してみるか」
「ですね」

鏡花が座った後、佐々木が立ち上がる。

「“陸竜”の構造周りでは、弱点らしい部分は無し。硬い外殻の隙間を狙って中身を攻撃すれば、と思ったら、中身が無かったのさ」
「中身が無い、ってゆーと……」
「遠隔操作のハリボテ、といった感じかな」
「じゃあ、やっぱり部位ごとに破壊していくしかないってことですかね」

渥美の言葉に、佐々木は首を横に振る。

「ゲームのようにには行かないかな。十六の部品が冗長性を持っていて、一つでも残っていれば自己再生なんとかで全体を復元できるようになってたさ」

そこまで言って、佐々木は椅子に腰かける。

「形状データを自前で持たずに毎回サーバから拾ってくるんで、部品全てを一気に破壊されない限りは無敵ってこと」
「何すかその無理ゲー」
「まあ、その分、移動速度や反応速度については難ありだけどさ」
「……ふむ。存在を確約する“祝福”を与えられた存在といった感じか。まったく見事な“天災”だね」

三人の話を黙って聞いていた教授が感想を述べる。その対面では、鏡花が目を閉じて、思考を続けていた。

「でも、それなら、うーん……」

12 “対決”

壁の隙間から入り込んできた、夜明け前の冷えた空気に、クロスは身を震わせて目を開いた。

見張り小屋で“陸竜”の襲来を意味する“大災害警告”の烽火を上げ、街の方角でも同様の烽火が上がったことを確かめた後、クロスとセキの二人は休息をとることにした。

携帯食糧を温めて腹に収め、毛布にくるまって眠りに就いてから数時間。床の上に置いていた“証”を見て、新着の伝言を知らせる幻像に触れる。

『あー、黒須君、起きたら連絡下さい』

「……」

乾燥した冷気による喉の痛みにかめつつ、クロスは身体を起こした。隣で寝ていたはずの師匠の姿が無いことに気付いて、彼は立ち上がり、窓から外を窺う。

見張り小屋に辿り着いた頃から降り始めていた雪は止んでおり、外に出ていたセキは車に積もった雪を払い落していた。

「おはようございます」

「ああ、起きたか」

セキは車に覆いを被せると、振り返って部屋の中に戻った。

「どうだ、行けそうか」

「ええ、まあ……でも、街に戻っても、出来ることなんて無いですよね」

浮かない表情のまま答えたクロスに対して、セキは苦笑する。

「街の連中が港に避難するのを手伝ってやれ。俺にはまだ役目がある」

「……盾、ですか」

「そうだ」

セキは真顔に戻って、左手の籠手を構える。

「“砲”が無いってのは痛いし、今回は相棒も居ねえが……ま、運が良けりゃ生き残れるさ」

クロスは黙って足元に目を向ける。左手に握っていた“証”が視界に入り、伝言を思い出す。

「連絡が欲しいみたいなんで、ちょっとだけ待っててください」

「ああ、わかった」

設定が変更され、横に立つセキにも聞こえる音量で声が聞こえ始める。

『おはよう、黒須君』

「ああ……何かあったか」

通話相手はしばらく沈黙した後、話し出した。

『もし必要なら……昼過ぎまでに“陸竜”を止められるかもしれない“術式”を用意できると思う』

「本当か」

クロスはセキと顔を見合わせた。

「軍の“坤轟大砲”でも傷一つ付けられない相手だぞ」

『動作検証できないから実際に効くかどうか分からないんだけどね。駄目元でもやってみる価値があるんなら、協力したい』

“証”から聞こえる少女の声に、クロスは問いかける。

「“観測者”は世界を観測するだけで、人間を助けるような存在じゃないって聞いてたよ」

「うーん、まあ、その辺はよくわかんないけど」

“証”の少女は言葉を続ける。

『あれが“こつち側”の誰かが作り出した、破壊のためだけの不自然な代物で。もう無関係ではられないというか』

「“作り出した”ってことは、あれは“術式”なのか」

『似たようなものかな。それで、関さんは確か、“陸竜”と戦ったことがあるんだよね』

「……ん、お、俺かよ。俺は別に」

急に名前を呼ばれたセキは、顔の前で手を振りながら一步下がる。

「いい加減慣れて下さいよ師匠」

「そう言われてもなア、どうも苦手なんだよな……」

『実際に戦った人の意見を聞きながら、作戦を詰めていきたいんで。“術式”が完成するまで、ウチの渥美と相談して欲しいなー、と』

「うーん。まア、仕方ねえな」

セキは両手の拳を握って構えると、覚悟を決めた表情で呟いた。

「……よし。さあ、煮るなり焼くなり好きにしゃがれ」

「だからそういう話じゃなかったですよ」

「ま、駄目でも俺様がなんとかするからよ」

“陸竜”の行動の予測とその対処方法についての話を終えた後、遅い朝食をとってから、セキは荷物を下ろした車に乗り、街へと出發した。

クロスはそれに同行せず、完成した新しい“術式”についての説明を聞き始める。

『“術式”の効果範囲は、半径六十メートルの球体。発動時には“陸竜”全体を範囲内に収めてないと駄目』

“証”に映し出されている“陸竜”の全体像を取り囲むように、半透明な球体が表示される。

「つまり、“陸竜”の体出来る限り近付いて、発動させる必要があるってことだな」

『うん。あと、実際に効果が現れるまで範囲内に収め続けていること』

「どれくらいかかるんだ」

『それがちよつと予想できない。一瞬で効くかもしれないし、一分くらいかかるかも』

クロスは腕を組んで、眉をひそめる。

「効くかどうかも、どれだけ耐えればいいのかも不明ってことか…
…厳しいな」

『もうちょつと何とかならないか考えたんだけど、液晶の画面に収めるにはギリギリだし、ライブ러리読み込みを使うと発動に時間がかかったちゃうんよ』

「まあ、仕方ないな」

時刻は夕方。

“陸竜”の位置を確認したクロスは、三階建ての建物の屋上からロープを伝って地上に降りた。

ひび割れた舗装道路を移動し始めた彼に、“証”からの声が状況を伝え始める。

『そのまま直進。つぎの交差点で待機』
「了解」

近付いてくる足音に合わせて揺れる地面に気をつけながら、交差点の手前で立ち止まった。

『遮蔽物があっても相手の索敵能力には関係無いから、瓦礫に当たったり潰されたりしないように気をつけて』

無意識のうちに道路の端に移動しようとしていた足が止まる。

「やりにくいな」

クロスがそう呟いたとき、交差点の先に見えていた建造物が崩れ落ち、“陸竜”の頭部が現れた。

思わず身構えたクロスに気付いていないかのように、“陸竜”はゆっくりと歩を進め、道路を横切っていく。

頭部が見えなくなり、続いて前足が瓦礫の山に隠れた瞬間、クロスは走り始めた。

『パターン変化なし。あと五十メートル』

降り積もった雪を蹴散らしつつ、彼は“陸竜”に横から接近していく。左手で“銃”を抜き、発動命令の言葉を放つ。

「“装填”」

銃の周囲に赤い魔法陣が展開されていく。展開完了まで十秒。

『プラズマ球！ ええっと、これ迎撃パターン？ だよね？』

“陸竜”の前進が止まり、黄色の鬣たてがみが放電を始める。励起した気体が上空で集まり、いくつもの光る球体が形成されていく。

『止まっちゃ駄目』

「わかってる——ッ！」

“陸竜”との距離を半分まで縮めたところで、不規則に揺れていた雷球のひとつが動きを直線に変え、一瞬前にクロスがいた場所を直撃して水蒸気を発生させる。

『ちょ、渥美さん、何これ』

慌てる通話相手に構わず、クロスは走り続ける。次々と蒸発していく雪に背中を押され、姿勢を崩しそうになる。

クロスは右手を地面につき、勢いを殺さずに斜め前方に転がった。最後の雷球がすぐ横に着弾したのを横目に見ながら起き上がる。

『黒須君！ 次、咆哮！』

接近を諦め、近くの瓦礫の陰に膝をつく。建造物の上から顔を見せた“陸竜”の口から、圧力を伴う重低音が響き渡る。

舞い上がる雪の中、クロスは再び立ち上がり、走り始めた。

『残り十メートル』

「――発動せよ」

走りながら、“証”に表示されているはずの“術式”を展開させる。クロスを取り囲むように、白い輝きが広がっていく。

『尻尾！』

左手の“銃”を構える。“陸竜”の尾の一振りによって粉碎され、飛散する無数の瓦礫に向かって弾丸を放ち、軌道を逸らして直撃を避ける。再装填に十秒を必要とする“銃”を仕舞い、代わりに“証”を取り出す。

『た、体当たり！』

熱気を帯びた橙色の鱗がクロスの眼前に迫ってくるが、前後の建物に妨げられ、その勢いは鈍い。

後ろに飛びながら、クロスは右手で“証”の表面に触れる。一瞬の間、視界が白く染まる。

『発動確認！　ってまたプラズマ？　積極排除パターン？』

見上げると、再び放電を始めた鬣が視界に入る。初回を遙かに上回る勢いで生成されていく雷球を見たクロスは、直撃を少しでも避けるため、前方に跳躍した。

直前までクロスが立っていた場所から、次々と雪煙が舞い上がる。

そのままの勢いで“陸竜”の胴体にぶつかったクロスは、その表面から発せられる熱気に顔をしかめた。

上空に漂う無数の雷球は、クロスが胴体から離れる瞬間を狙っている。

「このまま耐えてろ、ってか……」

クロスがそう呟いた瞬間。“陸竜”の動きが止まり、鱗の色が橙から赤へと変化していく。

雷球は空中で消滅していくのを確認して、クロスは熱が失われていく胴体から一歩離れた。

「これは……」

『うん、順調！　自己再生パターンに入ったみたいだけど、逆効果だっけの』

雷球は放たれることなく散っていく。“陸竜”を支えていた四肢が力を失い、胴体が地面にぶつかる。その衝撃で、“陸竜”を形作っていた鱗の一部が剥がれ落ち、その内部がさらけ出される。

『これなら、一分もあれば機能停止する。黒須君はそのまま——』
「キョーカ！」

剥がれ落ちた鱗の間から中を覗き込んだクロスが、少女の声を遮る。

「中に、何か――」

動きを止め、色を失って崩れていく“陸竜”の外殻から、“それは這い出した。”

『……二重構造、って』

“陸竜”を二周り小さくし、鱗の色を漆黒へと変えたような“黒^そ竜”は、折り畳まれた翼を広げようとしている。

「“術式”が効いてないのか」

『えーっと、“術式”はまだ発動してる、から、それはスタンダード型の別オブジェクトで、“遮断”^{フィルタ}が通用しないタイプなのかも』

クロスの問いかけに、慌てた声で少女は答える。

「また意味不明だけど――どうする？」

『外殻は九十五パーセントの崩壊を確認。“術式”を終了させて、もう一回撮影をお願い。解析する！』
「わかった」

建造物に囲まれた狭い空間で翼を広げることを諦め、前進を始めた“黒竜”に向かって、クロスは“証”を構えた。

「つて、おい、速いな」

移動速度の違いに驚きながら、クロスは後を追って走り始める。

『オブジェクト名は“ニドヘグ・ツウアイNidhogg-Z”。サーバと通信してない分処理が軽いのか。“アインNidhogg-E”より機動性が高いな』
『行動パターンは……駄目か。全然違うつぱいのさ』

“証”から微かに漏れてくる複数の声を聞きながら、クロスは走り続けている。

『ごめん、黒須君。中身があるなんて……』

「謝るなよ、キョーカ。それより、なんとか対処法を頼む」

“黒竜”は“陸竜”とは違い、廃墟を避けるように道路上を進んでいる。距離を離されないようにするのが精一杯のクロスは、息が上がりつつある。

「まずい、な……」

障害物を避けて時折方向転換をするものの、“黒竜”はハコダテの街に向かって前進を続けている。

『再生しないんなら、無敵じゃないんじゃないね』

『そうかもだけど、有効なダメージを与えられる火力が必要なのだ』

緩い坂を上り切ったクロスは、遠くに街の灯りを確認した。蒼から黒へと色を変えつつある景色の中に、“黒竜”は溶け込みつつあ

る。

「くッ」

酸素を求めて口が開き、足が止まる。

倒れそうになる身体を支えようと、手を膝について俯いたクロスの耳に、術式駆動機関の音が聞こえてきた。

顔を上げると、街の灯りよりも近くで揺らめく、小さな光が視界に入り込んだ。

荷物と同乗者を降ろして軽くなった車は、必要な武装を街に取りに戻る時間をセキに与えていた。

道路脇に車を止め、彼の身長ほどもある長方形の盾を側車から引きずり出すと、蒼い空を背景に近付いてくる黒い竜の前でまっすぐに構える。

「ここは、通さねえよ」

左手の籠手を盾と連結させ、発動命令を口にする。

「顕現せよ」

盾の表面を覆うように、青色の魔法陣が展開していく。

「——師匠！」

“黒竜”の足音に混ざって、クロスの声が届く。

「北方特使、国家認定特級開拓士、“鉄壁”のセキ・ジョージは、今度こそ誰も死なせねえ」

眼前の敵を排除しようと前脚を振り上げる“黒竜”に対して、セキは口角を上げた。

「“万城の盾”、だ」

巨大な長方形の光が“黒竜”と激突し、青い輝きが周囲を明るく照らす。

“術式”を発動したセキは、盾を構えたまま後退し、再発動までの時間を稼ごうとしている。

『剣での攻撃は多分効かない。黒須君の銃なら通用するけど、二桁三桁じゃ倒せないと思う』

「効くんなら、やってやるよ」

左手に持つ“銃”を撃つ。“黒竜”の背中で弾けた圧縮空気は、有効な傷を与えたようには見えなかった。

再装填まで十秒。その間に距離を詰めるために前進する。

『あかんね、倒せるまでに何時間かかるやら』

『んなこと言ってないで、考えるのさ』

右手に持ち替えていた“証”から聞こえる声に、クロスも思案する。

「せめて手数が増やせればな」

『黒須君を加速する“術式”とか、ちょっと考えとけば良かったよ』
再び銃を撃つ。弾けた鱗の欠片が、再び発動した“盾”の青い光を反射する。再装填まで十秒。

「加速じゃ駄目だ。この十秒が無くならないと――」

クロスは足を止め、両手を見る。

左手には“銃”。再装填まで五秒。

右手には“証”。そこには、もうひとつ“術式”がある。

魔法陣の展開を終えた“銃”を地面に置き、左手で“証”を操作する。

撮影された“銃”の情報が“術式”に変換され、“証”の表面に表示される。

『黒須君、それは――』

“発動”

正面に構えた“証”の前に、もう一つの“銃”が出現した。

魔法陣の輝きに包まれたそれを掴み、引き金を引く。圧縮された空気が放たれ、“黒竜”の鱗を削り取る。

数秒の後、左手の“銃”は消滅するが、与えた傷は残っている。

“発動”

再び“銃”が現れる。左手で掴み、引き金を引く。クロスは“銃”が消えるのを待たずに、それを投げ捨てる。

「しれなら——行ける！」

13 “消失”

共有マシンの観測画像にノイズが入り、次々に暗転していく。

「ちょ、渥美さん、これ！」

「ああもう、サーバに負荷かけ過ぎだっつーの」

渥美は複数開いていた観測カメラのウィンドウを閉じ、上空視点のみを残す。

続けて画像の更新間隔を一秒から五秒へと変更した。

「まだ安定しねえのかよ」

ノイズ交じりの画像には、赤い携帯電話を片手に構えながら拳銃を撃つ少年が写っている。

“Nidhogg-Z”という名前の黒い竜は、度重なる銃撃に痺れを切らしたように振り返りつつあった。

「でも、これなら倒せるんじゃないか……」

「黒須君、もしもし！」

鏡花の携帯電話との通話が切断される。“枯渴世界”クライアントの情報画面に、赤文字の警告が表示される。

「佐々木さん、翻訳」

鏡花の横から画面を覗き込んだ佐々木が、英語の文章を読み上げる。

「“事象改変許容量を超えました。該当区画の全処理を強制終了します”」

共用マシンの横に置かれているスマートフォンの液晶画面から“術式”が消滅し、メニュー画面に切り替わる。

観測画像はそれ以上更新されることなく、暗転した。

「全処理を終了って、“枯渇世界”が止まっちゃったってこと？」
「ちょ、鏡花君、顔近いさ」

鏡花に詰め寄られた佐々木は、慌てて一步下がる。

「とりあえず、“向こう側”の世界が消えてなくなるってことは無いから安心するのさ」

佐々木の言葉を、教授が補足する。

「“枯渇世界”は、並行宇宙の観測機だ。たとえ完全に停止したとしても、観測ができなくなるだけで、黒須君たちは消滅しない」
「……並行宇宙？」

教授は首を縦に振る。

「地球の歳差運動も考慮した天体情報、緻密な自然環境、それに独自の理論に基づいて復興しつつある文明。それらをシミュレータで再現しているのではなく、実際に存在する“別世界”を観測しているんだ」

「あかね、代行者とのリンクが切れてて、観測機能が使えねえ。再接続ってどうやるんだ」

渥美の言葉を聞いて、佐々木は自分のマシンに戻って操作説明のドキュメントを検索し始めた。

「リンク」「再接続」……これか。インタフェースの座標情報を代行者の座標と合わせることで、自動的に再接続処理が行われる」「座標を合わせるつーと、“各務研カスタム”を函館に持つてけつてことですかい」

「まあ、意味としてはそんなところだろうさ、でも――」

「佐々木さん、またメッセージが出てます」

鏡花に言葉を遮られた佐々木は、困惑した顔で席を立つ。

「渥美君でも翻訳できるだろうにさ……えーと。“即時対話機能が無効になったため、観測機の時間移動演算を再開します”」

「えーと、つまり」

左右から画面を見ながら首を傾げる鏡花と佐々木に対して、渥美は黙ってウィンドウ上の一点を指し示す。

時間経過比一万パーセント。鏡花が暗算結果を口にする。

「こっちの一分が百分、一時間が約四日、一日が三カ月ちょっと……んー。ちょっとまずいんじゃないの、それ」

渥美の言葉を聞いて、鏡花は彼の両肩を掴んで前後に揺らす。

「まずいじゃん、はやく函館に行ってリンクを復活させないと」

「は、羽村ア、お前さ、そこまで、何時間かかるか、わかっとなるんかよッ」

手を止めた鏡花は、自分のデスクで状況を聞いていた教授に顔を向ける。

「みら兄ィー」

「寝不足で車運転するのはちょっとなあ」

「俺も今からバイクでつてのは遠慮ッ、羽村、揺らすな」

再び渥美の上半身を揺らし始めた鏡花の頭に、佐々木の右手が乗せられる。

「いや、だからさ、ファームウェアいじればいいだけじゃないのさ」

自分の席に強制移動させられた渥美がファームウェアの改造を始めた後、鏡花は丸椅子に座り、教授の言葉を待っていた。

「さて、今のうちにいろいろ説明しておこうと思うんだが、どうしたものかな」

「……とりあえず、“枯渴世界”に“ニーズヘッグ”がいる理由^{わけ}を」

各務教授は頷き、腕を組んで話し始める。

「五年前、経過観測を終えて解散した“枯渴世界”プロジェクトから、とある会社がサーバの管理を引き継いだ。“枯渴世界”の再現度の高さに目を付けたその会社は、残念ながらその正体には気付かなかった。そして、“事象改変モジュール”を利用して、想像上の

怪物が現実世界にどれだけの被害を与えるかというシミュレーションを行ったんだ。で、そのために北海道に出現させた怪物が――」

「“ニーズヘッグ”と」

「あー。今の話からすると、その管理会社イコール、初代“ドラゴンズ・ワイルド”の開発会社でことすか」

渥美が視線を上げて言葉を挟む。

「うむ。今はもう潰れてしまっているけどね。つまるところ、諸悪の根源は既に存在していないのだ」

「今もサーバが動いてるってことは、誰かが管理してるんすよね……おっと」

鏡花の視線に気付いて、渥美は慌てて作業に戻る。

「もちろんその通りだが……渥美君も気になってしまいうーだし、後は全部終わってからのの方がよさそうだね」

新年を迎えた開拓者^{ハコダテ}の街は、例年以上の活気に満ちていた。

“陸竜”撃破の知らせは数日で国中に知れ渡り、街に運び込まれた残骸を一目見るために、本土から海を渡ってきた旅人の姿も増えてきた。

星形の砦の見張り台から街を見下ろしながら、クロスは何日か前のあの夜のことを考える。

セキからの指示を受け、クロスは移動しながら“黒竜”の首に攻撃を集中させた。

百回を超える銃撃の繰り返しで“黒竜”の鱗を弾き飛ばし、肉を削ぎ始めたとき、“黒竜”は攻撃目標をクロスに変え、その直後にすべてが終わったのだ。

背中から放電を始めていた“黒竜”は跡形もなく消滅し、“代行者の証”やセキが街から運んできたクロスの父親の“大型盾”、そして、“銃”やセキの車も起動しなくなった。

移動もままならず、廃墟の中で一晚を過ごした二人は、ようやく動くようになった車で街へと帰還した。

クロスの上着の中には、まだ沈黙したままの“証”がある。

どんなに呼びかけても何の反応も無いということは、無茶な使い方をして壊してしまったのだろう、と彼は考えている。

どこからか漂ってきた炊事の匂いに、クロスは意識を引き戻される。

昼飯をどこで食べようかと考えながら、カミオカにあるという世界干渉機に向かって、彼は一言、呟いた。

「キョーカのおかげで、ハコダテは助かったぜ」

“戦いのあと”

腰を上げた少年の上着の内側から、着信音が鳴り響いた。

少年は驚きの表情を浮かべながら、壊れてしまったはずの赤い携^ス帯電話を取り出し、応答アイコンに触れた。

「キョーカか」

『その通りでございます。生きてるよね、ちゃんと。三時間ぶり、じゃないのか、えーっと、三百時間くらいぶり？ おはよう？ こんにちは？』

少女の声に、彼は苦笑する。

「例によって意味不明だけど、そうだな、今のこっちの挨拶は、今年もよろしくお願いします、かな」

『お。おー、なるほど。明けまして、おめでとう』

五稜郭の見張り台の階段を降りながら、少年は疑問を口にする。

「今までどうしてたんだ」

『いやもう、“ニーズヘッグ”の中身の処理と連続複写にサーバが耐えられなかったみたいでね、というか黒須君なにやってんのさー。結果的に無事で良かったけどさー。もー』

「おい、大丈夫か」

『あー、うん。ちょっといつもより稼働時間が長くてさ、充電不足かな。うん』

「疲れてるなら、明日にしたらどうだ」

少年の言葉に、少女は不機嫌そうな声を上げる。

『黒須君はゆつくり休めてるみたいじゃないの』

「そうでもなかったぞ。“術式”は動かなくなるし、街の人たちへの説明も大変だった」

『なるほどなるほど。お疲れ様です』

「まあ、説明はほとんど師匠がしてくれたんだけどな」
『関さんがお疲れ様だよ！』

でもほんと無事で良かったよー、と繰り返す少女の声を聞きながら、少年は皆から外に出た。

正午を知らせる鐘の音が聞こえてくる。太陽の光に目を細めつつ、彼は呟く。

「……眩しいな」

『あー、そっか。そっちは昼だもんね』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3916v/>

冬の少年と夏の少女

2011年8月1日09時10分発行